
銀色の軌跡

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀色の軌跡

【Nコード】

N3436W

【作者名】

黒猫

【あらすじ】

地球消滅から神様の救済措置で中世ヨーロッパの神話に似た剣と魔法の異世界へ送られることに。幼馴染みの二人が、神に与えられた人生を懸命に歩いていくと、徐々に明かされる新世界での使命。そんな運命に翻弄されながら、平穏な日々を過ごすために最強への階段を上っていく。

第1話 送致（前書き）

始めまして。黒猫です。初投稿作品なので至らないところもあるとおもいますが、楽しんで頂けるような作品にしたいと思しますので宜しくお願い致します。

今回は、地球から異世界に飛び出すまでの話です。

・魔法の解説を修正いたしました。
・ミオの属性を修正しました。
(2011/9/2)

それでは、宜しくお願いします。

第1話 送致

世界は産業革命以後、人口が急速に増加するに従い化学や物理、数学といった数式や記号で世界が語られ始めた。

それに追従して自然は自治体や国家、更には世界レベルで守らなければ、消滅の危険さえ帯びてきている様になってきた。

俺みたいなちっぽけな存在の全てがある、この地球からすれば人類はまるでオーソドックスなファンタジー小説に出てくる『魔族』みたいに思えてくる。

だって、そうだろう？ 際限なく資源を消費するだけ消費し、自然を破壊して星を喰らっている様なんだから。

人類は、科学的に言えば哺乳類に分類されるのだろうが、行動で分類し生殖行為という点を除けばウイルスに酷似している。

星に巢食った病原体のように、宿主を喰らい続けて自らの存在基盤の危機すらもいとわず増殖を繰り返している。

…教師のいつもと変わらずの睡眠誘導音波に抗いつつも窓の外、夏と呼んでも差し支えない程のうだる暑さの先にある少しガスった空を見上げながら、そんなとりとめもない事をツラツラと考えていた。

「…ジ、…ト…ジ、…オイ！つて、聴こえてんだろ！！今、舌打ちしたの聞こえぞ！氷室冬司！！」

あー…、なんか横から俺を呼ぶ声が聞こえる…

七月初旬なのに五月蠅い八エ…もとい、腐れ縁の八重山七海 が喋ってきた。

「…五月蠅い。喚くな。潰すぞ。」

「うわっ！恐っ！こんなにも暑い今の時期に寒々しく刺々しいお言葉っ！涼しくもないし、寧ろ、凍死する！！」

「はあ…、お前…周り見えてんのかよ？」

当然、今は授業中。一人立ち上がって叫んでいたこの女に冷やかな視線が集中していた。

「はうあっ！！す、すいません！

…くっ！個人戦で挑んでいた私に対して団体で応戦するとは…しかも攻撃は精神系の視線ですか！付加属性は氷か？！もう寒々しいのは名前だけにして！」

「じゃあ、七海こそ毎回返り討ちにされるのに性懲りもなく突つか

かって来んの止める。あと、ゲームのし過ぎだし、ふざけるのは名前だけで十分だ。いっそのこと七転八倒に改名したらどうだ？」

「くっ！どうだ？じゃないよ！私より上手い事全然言ってるのに…何この敗北感（泣）」

着席し、やっと静まった。

七海は黙ってればかなり可愛い。小さいときから非公認ファンクラブがあるのは、本人だけが知らない事実。

そして、今日までずっと過激派と化した一部の連中にあらゆる方法で挑まれ、時には奇襲され、そして撃退し続けた結果、頭でも腕っぷしでも暫く負けていない。

講義がおわり、帰路についても七海は落ちこんだままだった。

「…いい加減に機嫌直せよ。そんなんで一緒に帰っても辛気くさいだけだろーが。」

「…だって、毎回返しに愛が感じられないんだもん…」

「愛？それに、“もん”って…。あのなあ、幼馴染みにそんなもん期待すんな。」

「なんでよお！（泣）私だっていい加減心が折れるよ！」

俺の身長は185cmで、コイツの身長は160cm。当然、下から上目遣いで見つめられる状態になる。

その上、潤んだ目が合わされば幼馴染み耐性があっても攻撃力はかなり高い。

「…うっ。…わかった。だから泣くな…。はぁー。今回はキツくい過ぎた。何か食いモン買ってやるからいい加減に機嫌直せ。」

そう言うと、若干食い気味に…

「やった！！じゃ、帰り道からはチョット外れるけど、イイお店見つけたんだ！き・の・う！」

と、言い放った。

まあ、何時もの事だしあの表情を見られるなら悪くない。

いや、好物かもしれない。

「んな事だろうと思ったよ。で、どんなの店なんだ？」

だけど、そんな事言うと調子に乗るからなるべく言わない。今回も口にはせずに先を促した。

ちなみに俺は、七海のセンスや感受性には一目置いている。多感も極まれば五月蠅くなるのかもしれないが…

とにかく自分が興味を持ったものなら、大抵はその道のプロ顔負けの知識だったり技術だったりを習得したりするから世の中分らない。

「うーんとね、ケーキが売りの喫茶店なんだけど、今回は一言で表すと“アンティーク”かな。店構えもインテリアも店員さんのファッションも。中世の西洋？みたいな」

「ああ、だからカフェじゃなくて喫茶店って若干格調高く言ったのか。でも、七海の嗜好から考えるとメイド喫茶って感じを想像してしまっただが」

「いや、言わば今回は本物なのだよ！冬司くん！！まあ、だからって決してアッチが偽物という訳じゃないんだけどね？」

「いや、乱歩の小説よろしく俺の名前を挟むな。じゃあ、バトラーとかが出てくる感じか？」

「そうそう！上流貴族になれるってもんですよ！」

「いつもながら、お前の感嘆詞の乱用には辟易するが、今回は大目にみても良さそうだな。楽しみだ。」

話していると細い路地を抜け、高級住宅街に入るとその館はあった。まさに『館』なのだ。

「これは…凄いな。俺らの年代で入っても大丈夫なのか？」

「平気だよ？密かにウチの大学で話題になりつつあるんだから」

「ふむ。しかし建物はゴシック調か。本格的だな。こりゃ、インテリアや給仕も期待できそうだな。」

「でしょ！あー！我慢できない！！先に入ってるわよー！！！！」

さっさと走って中に入ってしまったので、俺は焦らず外観や前庭を
観ながら入口に向かった。

…はずだった。

しかし、ドアを開けた瞬間にまばゆい光に包まれ、手放した意識を
取り戻すと真っ白な空間に漂っていた。

「…どういうことだ？」

と、呟いたが何がなんだかわからない。夢…ではなさそうというの
は分かるんだが…

暫くすると、床に着地したので混乱する頭を落ち着けるために、体
を確認し周囲を見回した。

「ふむ。体に異常はないな。しかし、誰もいないのか…」

体を動かし、異常を確認してから周囲を見回し呟いた。

「いや、ここに居るよ。」

誰も居なかったはずの背後に突然半透明の男か女がよく分からない人（？）が現れた。

「誰だっ！」

こんな空間にいるのと半透明って時点で怪しいのに、突然現れて背後を容易く取られた事に動揺したが、向こうは何か知っていそうな顔でニヤついているので、情報を聞き出しやすくするために平常心を心掛けた。

「まず、自己紹介といこうかの。我は、主の在った世界の創造者の一柱。空を創りし神じゃ。と、言っても主の世界を創るにあたり、担当したのが“空”に象徴されるものだったが故にその他の連中からは呼ばれておる。が、幾つか創った別の世界ではまた違った名で呼ばれておるわ。」

そう自分の存在を明かすと、徐に俺の頭に手を置いた。

「この空間や主が在った世界の状況など、わからんであるう？直接イメージをおくろうぞ。」

すると、突然膨大な量の情報が頭に雪崩れ込んできた。

「くっ…。あ、頭が…わっ、われ…。はあっ、はあ…そ、そうか…アナタの存在は未だに理解しがたいが、しかし、そうか…。元の世界は無くなった…のか。」

頭をかき混ぜられたような激痛に耐えると、与えられた情報を否応

なしに理解した。

その情報の要点を抜き出すと…

傍国で行われると話題にもなった、人工ビッグバン生成観測の実験中に事故が起こり、地球を中心として新たな宇宙が生まれた。

それに伴い瞬間的にあまたの存在が欠き消えた。

しかし、空の神が創った幾つかの世界の中でも霊格が段違いに高い俺が居た世界のモノ全てを消滅させるのは避けたいことだった。

故に、空の神と波長が合い、順応性・肉体・精神・知力といった人の性能が共に高く、将来性が未知数に高い存在で、善良な人間を別位相世界…有り体に言えば、異世界におくる事にした。

…それに選ばれたのが、俺…らしい。

「この空間は異世界へ行くための調整空間で、家族とか友人はもう消えたってことか…」

…って、事は七海も…

そこまで考えると、俺は不覚にも涙が浮かんだ。

だが、今は話を聴いておかないと取り返しをつかない事になりそうだったので、気持ちに蓋をし後で考えると決め、話を聞き直した。

「付け加えれば、これだけ霊格の高い世界から強制的かつ意図的に個の存在を維持したまま送るのは、凄まじい力を要する。故に、これから送る人類は、男女一対とした。格の低い世界から高い世界に送る場合は、惑星規模でいくつか送ることが出来るのだから比すればこの労力わかるであろう?」

…顛末はわかった。が、感情的には納得できない。

なんで、一部の人間の性で強制的に異世界に送られなきゃならないんだ。と、理不尽さにムカついた。

すると、

「まあ、理不尽に思うのも当然だがな。

しかし、どこでも理不尽な事で満たされておるのは変わらんだろう。それは主も分かっておろうよ。それは異世界でも同じよ。理不尽は消えん。

だが、他の善良な存在が滅するのは惜しい。主の身近な善良な魂だけは、主がこれから行く世界に、生まれ変わらせてやる。しかし、その者らが生まれ落ちる時間は過去か未来かは決められん。ただ、主らの助けになるよう我の言葉を聴けるようにしておこう。ちなみに、他の魂はまた別の世界で生まれ変わるから安心せい。」

まさか、俺がそんなお助けキャラ有りのファンタジーな人生をこれから歩む事になるとは…

「…そうか。異世界行きもわかったし、他の連中も生まれ変わるなら、少しは救われるか…。しかし、俺の助けによって…良いのかよ？えーっと…世界への過干渉だったか？とかになるんじゃないのか？」

良くこう言う話では、神様は世界へ干渉しすぎてはいけないとか聞いたことがあったのだ。まあ、七海からの受け売りだが。

「主らの世界は、ちと優秀すぎたからの。我達は早々に干渉をやめただけじゃ。それが、そういう考えに至ったのじゃろう。他の世界はそうはいかん。直ぐに闇に傾く。」

そういうと、苦々しい顔をした。

「そういうもんなのか…」

まあ、一応納得しておくか。と、次にこれから行く世界についてと今までの質問、異世界入りするにあたっての要望をした。

「ふむ。良からう。我も止められなんだ責があるゆえな。しかし、我にも出来んことはあるからな？それは承知せい。」

…しかし、泣き叫ぶ程度はするかと思っておったが、予想より強い。う。順応性と精神力の高さのなせる技か。しかも、イメージを送っても気絶しないとは…くっくっ…いやはや、主には驚かされるわ。初めは大概気絶するはずなんだがな。」

耐えたのは、主らの世界では…キリストとシッタールタ…だけじゃったな。

と、ホントに嬉しそうに笑った。

「はっ?!世界的宗教の開祖??マジか…。」

そんな大層な事を教えられると、俺はこれから何か使命を与えられるんだろつかと考えたが、後で聴こうと先送りにする。

とりあえず、話を進めよう。

「まず、これから向かう世界について教えてくれ。」

ふむ。というと、また頭に手をおいた。

今回は嘘のようにすんなり理解できた。どうやら最初をクリア出来れば、後は何でもないらしい。

そして、理解したところによると、これから行く世界はどうかやら所謂、剣と魔法の世界らしい。

もう少し詳しく話せば文明は中世ヨーロッパの神話風で魔法により形作られているようだ。

「七海がいたら喜びそうな展開だな…。」

そんなことを思いながら、与えられたイメージの整理を進める。

これから行く異世界の人類は、神や大精霊と呼ばれる存在を信仰し、声を聴ける一部の人や、力を使える人を道標に発展しているらしい。

人種は、ヒューマン・エルフ・ドワーフ・人獣・竜人がいるようだ。また、魔族や魔獣といった存在もいるようで、この二つの勢力が争っているらしい。

地理はというと、北大陸と南大陸があり、その間には海が広がり中央諸島がある。

北大陸は、三国に別れ、魔族が支配している。

極地のヴァンパイアが治める常闇の氷原ニヴル

中央のアンデットやデビルが治める湿原の荒野ヘルム

南端のドラゴンが治める灼熱の雷原ヘイム

対する南大陸は、4か国から成る。

東を治める武力に秀でた武国ガルズ

中央付近から南にかけて治める精霊の力に秀でた聖国アルフ

西を治める魔力に秀でた豊国ヴァナ

南大陸の北部に横たわる地帯を治め、中央諸島と他の南大陸との国

交の経由地である商国フレスト

武国・聖国・豊国・商国に囲まれた、永年中立不可侵国家ユグドラシル魔法学院。

そして、中央諸島には主に4か国ある。これらは西から東に掛けて横並びの関係にあった。

ドワーフの祖国、鍛冶国ヴェリール

エルフの祖国、森林国家スヴァルト

ヒューマンの祖国、技術国家ガルズ

竜人の祖国、山岳国家ヘイム

これら9つの国の内、中央諸島の4か国だけは両大陸との国交を持つ。

また、南大陸の人々の常識として、北大陸から南大陸に入るには商国ビフレストを通らなければ入国許可がおりず、北大陸は周囲を岸壁で囲まれていて、唯一の玄関口は南側に位置するムスペルであった。しかし、過酷な環境のムスペルだけに、入国するためには中央諸島を順番に巡り、暑さ対策と雷対策の準備をしなければならぬ。

もし、北大陸を踏破しようというものが居ればムスペルとヘルムの

間にある標高1万mのギン又山脈を越えることになる。そこを越えたとしても次に待ち構えるのは大半が沼地で気を抜くとアンデットに食われる。そんな口々に休むことも儘ならない土地が続く。時折顔を覗かせる荒れた台地には、魔族の中でも知能が高く残忍だと言われているデビル種が都市を作っているようで、休んだり補給するためには知り合いの手引きが必要になるので、滅多に南大陸の者は入れない。更に運よくニヴルに入っても同族以外の血を好み、大好物がヒューマンの血と言われている力の大魔族ヴァンパイアが統治している。奴隷制度が根強く残っておりヒューマンを見つけると奴隷狩りに会うような土地と伝えられている。

その為、北と南は直接の国交が無いと言われている。

…と、いう時代の異世界に送られるようだ。

「ますます、七海好みな世界だな…」

七海は中学に入った頃から、ゲームや小説の影響で様々な神話も覚えていた。俺との会話の最中に時々挟んでいたから俺も少しは覚えてしまっていたようだ。

「…と、こんなところか。じゃあ、次は質問させてくれ。」

そう問いかけると、質問が分かっていたかのように空の神は答え出
した。

「良からう。まずは、お主の対じゃな。これは、正直、誰でも良い。
主に希望があればそやつで構わんよ。希望が無ければ、主に近いス
ペックの女を蘇らせる。が、主は例外的に高性能じゃからのう。主
と比すれば他は似たり寄つたりじゃ。誰ぞ心当たりや気があるもの
が居れば、そちらにした方が良からうて。」

俺はやはりというか当然というか、一人の女の名前を呼んだ。

「八重山七海」

すると、俺の横に光が集い人の形に形成されたかと思うと、この空
間に入る少し前まで一緒に居た七海が記憶のままの姿で眠っていた。

「ふう……。ついでに主に与えた情報と同じものを与えておいた。あ
と他に質問は……。ああ、言葉と文字か。これに関しては世界共通の言
語と文字があるな。また、部族間言語、精霊言語、魔法言語といっ
たものがあり、各々の文字がある。よし。これらも与えよう。」

すると、今度は七海と俺に手をあて知識を伝えてきた。

「これで分かるはずじゃ。あとは…、我との通信手段か…。これから送る世界には、大精霊が管理する神が顕現できる聖地がある。そこに行けば会えるであろう。それに我らの声を聴こえる者もいるので。」

そこまで聞いて、さっき疑問に思ったことを教えてもらうために聞いた。

「なあ、そこまで至れり尽くせりだと、何か為し遂げなきゃならぬ事があるのか？」

「むっ…。やはり、気付いたか…。それは、残念ながら世界への過干渉になる故教えられぬ。が、お主らの運命に既に組み込まれておるから今は知らずともいわずれ分かる。それに、主のスペックなら楽じゃろうて。」

ニッ！と、笑顔を見せつつそう言った。

神も笑顔で誤魔化すのか…と、少し呆れた。

それから幾つか質問に答えてもらい、要望を伝えようとした時、七

海も起こした方がイイと考え揺すって起こした。

「おい！七海！起きろー！！」

「ん…。ふわあくって、あれ？お店…は？？ここドコよ！！」

まだ、理解しきっていないので説明し記憶の整理を促すと、これから要望を出すけど何か考えておくように伝え、空の神に向き直った。

「まず、姿と名前だが与えられたイメージだと、このままは異世界ではかなり変なはずだ。だから名前を変えて、姿も変えてほしい。」

「それもそうか。神に名を与えられれば、称号もつくしな。姿は…二人とも相当にイイと思うが…よし。髪と目の色を変えてやろう。」
と、というと俺の目と髪は白銀に。七海の目と髪は青銀になった。

「髪と目の色は魔法属性を表す。魂の属性が表れ普通ならその色に対応した魔法しか使えない。」

緋色は火属性、蒼色は水属性、黄色は土属性、翠色は風属性、といった具合にな。属性については、新しい世界で詳しく学ぶとよからう。

そして、単色の者は純属性と呼ばれ、その色の魔法しか使えないが、混成属性の者には使えない戦略級魔法や古代魔法も修練次第で使用可能じゃ。この者は、主らの時代にはすでに希少な存在になって居

り、長い年月で基本属性は混じりあい、何種類か混じって生まれる混成属性が大半を占めている。

混成属性者は、基本元素の他にそれらを元にした派生属性を使用可能じゃ。土と風で雷とかな。この者たちは基本属性は中級程度しか習得出来ないが、派生属性なら上級まで習得可能じゃ。そして、今は戦略級魔法を使用できるものは数少なく、古代魔法使用可能者に至っては片手で足りる人数しかおらん。じゃから、実質上級までが主力なのじゃ。その事から、派生属性も純属性として数える者も居るぐらいじゃて。

そして、みたところ主の色は、全ての属性の基である光の純属性。これは全ての属性が純属性レベルで使用可能の上、発現者は珍しい。

まあ、黒目黒髪という魔力を有さない者よりは有りうる。

女は…、銀が入っている故に全属性使用可能じゃが、水属性が強く出ているため水系属性以外の属性は混成属性の者と同レベルで使えるようじゃ。水系属性は水は勿論、派生の氷、雪などの水の状態変化の属性が上級まで使用可能という事じゃ。じゃが、髪と瞳の色は水の純属性の者とは違い完全な蒼ではないから、氷属性としておくのが無難じゃろう。何とも面白い魂の属性じゃな。

さて、名じゃが…

主は、アーダルⅡヴェラス。高貴な光と言う意味じゃな。して、女はミオⅡプラキドウス。静かな水と言う意味でどうじゃ。」

なんか、大層な名前を貰ってしまった…これは気を引き締めなければならぬ。

七海は…って、もうミオか。

ミオはまんざらでも無い表情だ。

「アーダル！私、ミオだって！改めて宜しくだね！！」

もう名前に馴染んでるって、どうなんだ？と思うが、もう元居た世界には戻れないのだから名残惜しくても新な名前でやっていくしかないと切り替える。

「ああ。宜しく、ミオ。」

そして、空の神、名前ありがとう。大事にする。」

「ふふつ。気に入ったみたいで良かったわ。」

ミオは何かあるかの？と、空の神が聞くと…

「魔法学院に入れる年齢にしてください。」

と、いった。

まあ、魔法の使い方なんて分からないし妥当な線か…

俺は、納得するところらを見ている空の神に頷いた。

「そうか…。それでは魔法教育が始まる16才位にしてやるつかの。」

すると、若干背が縮み、俺は170cm程度でミオは150cmちよっとという位になった。

「こんなところか。そろそろ時間じゃ。それでは、異世界の門を開くぞ。」

そついうと、空の神が光だし辺りが見えなくなった…。

光がおさまるとソコは森の中の朽ちた遺跡の祭壇の上だった。また、隣で横たわっているミオを起こす。

「おい！大丈夫か??」

「ん…、んふわぁ〜。よく寝た。って、ここが私たちのスタート地点なんだね！あー！楽しみ!!」

確かに、未知への期待は大きいが不安もまた大きい。

「ここから新しい人生が始まるんだ…」

そう、自分に言い聞かせるように呟いた。

気を取り直し、先ずは、この遺跡から出なければ。と、考える。何も考えずに外に出るのは危険すぎるので、まずはココがドコなのか何か手掛かりになるものはないかと辺りを見回した。

すると、今までは気にしていなかったが、照明など無いこの世界で不思議な事にお互いの顔や今いる祭壇の間を見回せる事に気付いた。壁も床も仄かに光っているようだ。

数秒、二人揃ってこの光景に呆けた後、素性の口裏合わせだけはいようと話していると何かの鳴き声が響いてきた。

魔獣か?!と、一気に警戒レベルがはねあがる。

辺りを見渡すと、祭壇から降りる階段の前にまだ使えそうな、恐らく供え物である二対の武器と服が置いてあった。

俺は刀の様に反った透明な刃が付いている白銀の剣と肘近くまである白銀のガントレットを装備し、一緒に置いてあった服は忍者が着ていそうな黒装束みたいな形だが、両袖はなく色は白地に金の刺繍が施され胸当てが付いている。装備すると体にあわせフィットした。

もう一对は、銀色の杖に宝石が幾つか埋め込まれたモノと白地に金の刺繍が施されたローブだった。それらをミオが身につけると、こちらも丁度良くフィットした。

そして己の武器を確認し、軽く動く部屋唯一の入口の方から誰かの走る音と悲鳴が響いてきた。

あと、50mってトコだな。

そう感じるとミオも分かったようで、互いに目配せした後、各々の武器を構えた。

「きゃあああああつ！だ、誰か助けてえー！！」

叫びながら、祭壇の間に転がり込んできた女性を守るため、俺たちの後ろに彼女をやるの間もなく虎のような魔獣が現れた。襲い掛かってきたが、ミオの杖で突かれ距離を取った。

一見すると、虎なのだが黒地に白い模様で、丁度ホワイトタイガーの色を逆にしたような獣だった。しかし、醜く歪んだ顔で吼えると口と爪から黒い霧を出し始めた。

「なあ、アンタ。守ってやるからコイツの事を知ってるだけ教えてくれ。」

と、落ち着けるように笑顔と冷静な口調で話した。

すると、さっきまで怯えていた目に活力が戻ってきた。

「…は、はい。名前はマーブルタイガーで討伐ランクはBです。影に入り、影から影への移動が可能な事が大きな特徴です。魔獣特有の障気を纏う部分は牙と爪で、噛まれたり切り裂かれると直ぐに壊死します。」

あとは…えーっと、光属性が弱点だったはずです！」

ミオと再度目配せし、魔獣に向き直る。

そして二人で名乗りをあげた。

「神月無双流アーダル ヴェラス、推し通る！！」

「同じく！神月無双流ミオ ヲラキドウス、参る！！」

そして、二人はマーブルタイガーに向かっていった。

俺は、初めて感じる弾丸の様な速度に驚きつつも接敵し、飛び掛かってきた魔獣の懐に入ると抜刀した。

胸の辺りがある程度まで切り裂いたが、鋼のような体毛に阻まれ致

命傷には至らず、爪によるカウンターまで仕掛けられたが、またも弾丸の様な速度でかわしてすれ違い様に胸とは真逆の背中を切りつけた。

完全に頭に来た様子のマーブルタイガーは、ミオや逃げてきた女の子に背を向け、剣を構えて牽制する俺と睨みあった。

その隙を逃さずに、ミオが飛び魔獣の上から背中への傷に目掛けて杖を突き刺した。

貫通したその瞬間、光が迸りマーブルタイガーは消滅。後には、透明なカードが残ったので一応回収しておいた。

こうして初の戦闘は、思ったよりもスムーズに終了したのだった。

実は、俺もミオもウチの流派、古武術神月無双流の師範代だったりする。

この流派は、剣術・棒術・弓術・徒手空拳を基本としている。

お互い獣は山での修行中に何度も討伐して夕飯にしてきたので、その経験が役に立ったようだ。

そして俺とミオは助けた女の子の所へ戻ると、声をかけた。

「大丈夫か？どこか怪我はないか？」

女の子はフルフルと頭を横に振り異常なしを主張すると、突然…

「あ、ありがとうございます！」
「そ、それにしても…すっ、スゴいですっ！！ランクBって言いまして、フルライドのチーム討伐でのレベルですよ？それをたった二人で…。しかも、あんなにアツサリと…あなた方は何者なんですか？」

「こちら辺ではお見掛けしない顔…ですが…？」

と、聞いてきた。

俺は、一瞬言葉に詰まったがさすがミオがフォローしてくれた。

「私達はビフレストの東から来たのよ。魔法学院に行きたいんだけど、後ろ楯がいなくてねえ…」

と、打ち合わせ通りに何食わぬ顔でスラスラと話した。ミオのこう言う所は正直、凄いと思う。

「そうだったんですか！学院は確かに貴族がギルドで有望な方しか入れませんものね。」

「そうですね？だから、取りあえず修行と魔獣討伐しながらたびしてるのよ。ところで、貴女は？」

と、彼女の素性を確認した。

「あっ！申し遅れました！私、聖国アルフ第3皇女ルクスステラ
「シルウエストリスと申します。」

「はああああ！？」

「えっえええ？！」

俺達が驚くのも無理もないと思う。

異世界入りして直ぐに要人と会うとか…ご都合主義もいいところだろ。

「そ…、そうか…。ところで、何故その皇女様がお供も連れずにこの遺跡へ？」

「実は、あまり知られていませんがココは王家の託宣神殿でして、100年に一度、神の声を聴く力を持った王の娘が託宣を受けに来るのです。」

それが今日託宣の間に入ったら、託宣の最中しか光らないはずのこの部屋が光っていました…

恐らく、あなた方を連れ帰るのが今回の託宣だったのでしょう。」

…はっ？

「いや、声を聴くんだろ？聞こえたのか?!」

「いえ、私はまだ経験が浅いのでどうするのが最良かが分かる程度です…」

「そうか…それで、連れていくのがベストだと思ったんだな？ミオ、どうする?..」

「ん…、良いんじゃないかな??一応、私達皇女様の命の恩人なんだから。」

と、いつと皇女は…

「皇女じゃなくて、ステラで良いですよ！あつ、それに！と、歳も近いみたいですし、お、お友達になってもらえたら嬉しいでしゅっ！！」

あ、噛んだ…

噛んだね…

と、俺とミオは目線で会話した。幼馴染みスキルというヤツだ。

「わかったわかった。じゃ、俺はアードルでいい。ヨロシク。」

「私はミオね！宜しく！！」

「こちらこそ、宜しくお願いします！」

自己紹介も終わったところで、祭壇の間ならぬ託宣の間を出た。

これから外に待たせている護衛と合流するそうだ。

「ねえ、ステラ。何で一人で託宣の間に来たの？」

「この神殿は、本来神の加護があるものと王族しか入ることが出来ません。」

「ん？じゃあ何故マーブルタイガーなんかいたんだ？」

「私もよく分からないのですが…、恐らく神殿の力が弱まってきているのかも知れません。」

「えっ！ソレってマズいんじゃないの？」

「ええ。ですので、御母様にご報告して、アーダルさんがさつき拾われたサピエンティアⅡカードを見せて頂きたいのです。ご存じかもしれませんがアレは討伐者、もしくは討伐者がいるパーティーしか手に出来ません。それ以外の者が許可もなく触れると、神罰として電撃がはしつたり、呼吸出来なくなつたり…、かつてサピエンティアⅡカードを使った拷問も行われたので、少なくとも聖国では法により王族は触れてはならないものになっております。」

成る程…、このカードはサピエンティアⅡカードって言うのか。

「見せるのは構わないけど、こんな小さなモノどう見せるの？手を離すと文字が消えちゃうよ？」

「それは渡す前に、その人の顔と名前を思い浮かべて念じれば、その人には読めるようになるはずですよ。」

ご存じ有りませんでしたか？と、聞き返された。

「俺らの流派は、ギルドに加盟するのは禁止されてるんだ。免許皆伝すればいいらしいんだが…それには自分だけの奥義を編み出さなといけなくてな？」

咄嗟のでまかせだが、何とか大丈夫だろう。

「そうそう。私たち、それを編み出す為に魔法学院に行こうと思つて飛び出してきたのよ。お陰で、身元保証されなくて強い魔獣を倒せばギルドも認めてくれると思つてたつてわけよわけよ。」

昔から付き合いの成せる技、阿吽の呼吸で辻褄を合わせた。

「そうなんですか。じゃ、御母様をお願いしてみましようか？」

「本当かっ!？」

「マジでっ?!」

入学の大変さは知識として知っていたが、いきなりネックだった後
ろ楯を得られるチャンスだ。喜ばずにはいられない。

「ですが、恐らく騎士と戦って頂く事になると思うのですが…」

ああ…そりゃ、世の中そんな甘くないよな。

一瞬、落ち込みそうになった。

しかし、まあ、でもさっきは試運転だったし大丈夫だろうと、気を
持ち直した。

申し訳なさそうにしているステラにミオが声をかけた。

「大丈夫だよ。多分!さっきのだって余裕だったし!」

し、しかしっ!と、更に不安そうに俺らを見てきた。…若干、熱っ
ぽい瞳で見られているのは気のせいだろうか…もう少し様子を見よ
うと、何でもない風にいった。

「ミオの言う通りだな。魔族や魔獣ならまだしも、普通の騎士には
負けんよ。ほら、もうすぐ出口だぞ。」

うう…と、唸ったが、暗い通路を曲がるとその先に明かりが見え
た。ステラはそっちに気をとられ、出口に走った。

転ぶなよ…!と、声をかけると俺達はその後ろを歩いて出口にむ

かった。すると、ミオが話しかけてきた。

「ねえ、騎士って強いのかな？アーダルはどう思う??？」

「そうだな…。まだ何とも言えんが、俺達ならマーブルタイガー程度なら一人で倒せるだろうし、余程の使い手じゃなきゃ大丈夫だろ。でも、気は抜けんが。」

フルライドのチーム討伐でランクBだと、個人討伐ならランクA相当だろう。相当強いが、倒せないヤツがないわけじゃない。それはミオも分かっていたようだ。

「そうだよな。上には上がいるだろうし…。まあ、やってみてから判断したって何とかなるでしょ。」

「まあ。魔法とか使われたら困るよな。ステラの護衛に魔法の基礎でも教えてもらうか。」

「おっ！良い考え！！感覚的なモノを覚えられたら、私達なら何とかなりそうだしね！それはそうと、あの娘の魂は地球人なのかな？」

そういうと、さっきまでの真剣な顔はどこかへ行き、代わりに面白いものを見つけた様な顔で俺を見てきた。

俺は興味ない風で、どうだかな。と、かえしたが…

「ねえ！あの娘、アーダルに惚れてたよね！地球にいた頃からかなりの人気だったしね。異世界補正も掛かって、磨きがかかったんじゃない？」

どろする〜どろする〜??.?!! ニヤニヤしていてムカついたので…
頭を叩いた。

「五月蠅い。何言ってるんだ。行くぞ。」

そう言っつて歩を進めた。

「ちょ、チヨット待ってよ〜!!」

遅れてミオがついてきて、俺達はようやく新世界の空気を吸った。

第1話 送致（後書き）

話毎にページ数が変わるかもしれませんが、暖かい目で見てやってください。

戦闘シーンがアツサリとし過ぎな様ですが、これから主人公達と同じ様に段々と成長する予定ですので宜しくお願いします。

誤字脱字、感想、リクエスト等お気軽にコメント頂けると嬉しいです。

次回も宜しくお願い致します。

第2話 王家（前書き）

どうも、黒猫です。ご訪問有り難うございます。

今回は、聖国アルフでのお話です。

それでは、始まり始まり。

第2話 王家

外に出ると、神殿は遺跡といってもいいほど荒廃していた。辺りは森に覆われ、神殿を浸食しているようだ。

入り口というか出口というかは悩みどころだが、神殿の内部への唯一の開口は思いのほか高い所にあつたようで、目の前には地面に続く長い階段があつた。降りたところには、護衛と思われる騎士や魔法使いの様な格好の小隊がそ等中で警戒に当たっているようだ。

先に走つて行つたステラはというと、もう階段を降りていて騎士団長の様な美中年と、線は細いがとても扇情的な女性と話しており、その3人がこちらに気付くと、やはり騎士団長だつたのだろう男は他の隊員に合図を送ると警戒に当たつていた小隊が全て階段下に集められた。

俺たちが階段を降り、ステラを含め集められた隊を見まわすと、美男美女が多くみな白に近い肌色で耳がとがっている。ステラに至つては神殿内では薄暗かつたお陰で分からなかつたが白磁の様な肌色で他の者とは雰囲気がるで違つた。隊の皆がエルフだとすると、ステラがハイエルフといった感じが。

そう一通り観察を終えた時にステラが護衛隊に向けて話し始めた。

「この方たちは、託宣の間においてマーブルタイガーに襲われそうだった私をたつた二人で救つてくださいました。男性の方がアーダルⅡヴェラス様、女性の方がミオⅡプラキドウス様とおっしゃいます。これから御父様に事の仔細を報告するため、客人として私と同じ馬車に乗っていただき王都までお連れしますので、宜しくお願い

致します。」

そういうと、今度は俺達に挨拶するように求めてきた。

こんなの大学の入学生代表で演壇に立って話して以来だなーと思いつながら、それらしくなるように気をつけて喋った。

「只今、紹介に与った（あずか）アードルⅡヴェラスと申します。属性は光。こちらはミオⅡパラキドウス。属性は氷です。私達二人とも種族はヒューマンで、商国フレストの東から学院に入学する為に身元の保証をして頂ける後ろ盾を得る為、強い魔獣を討伐しギルドに認めてもらうために旅をしております。此処が託宣の神殿とは知らなかったとはいえ踏み行ってしまった事にまずは謝罪いたします。ここで皇女様をお助けできたことが私達の唯一の酬いであると存じます。皆様にお会いできたことは何かのご縁でしょう。この出会いを大切に致したいと思えます。王都までの道中、何かとご迷惑をお掛けするかもしれませんが戦闘の折にはお力添え出来ると思いますので、何卒宜しくお願い致します。」

こんなモノかなと、ミオやステラを見ると満足そうなのでまたステラに場を明け渡した。

「それでは、アードル、ミオ。この護衛隊の指揮官2名を紹介いたします。まず右にいるのが第一聖騎士隊長のアトムⅡシルヴァ。左にいるのが第一魔術師隊長のプラヴィアⅡベナスタスです。」

アトム、プラヴィア。ご挨拶をお願いします。と、ステラがいうと…

「姫様から紹介に与った。アトムⅡシルヴァだ。種族はエルフ、属性は木でランクはSだ。この度は姫様を救って頂き感謝する。短い道中だが宜しく頼む。」

「私はプラヴィア＝ベナスタスよ。種族はエルフよ。属性は水でランクはA。怪我をしていたら言ってるね。回復魔法には自信があるから。よ・ろ・し・く!」

と、挨拶された。

シルヴァさんは、35歳位で背は190cm近く素早そうな体型をしている。寡黙で冷静な騎士といった感じでランクSと言うだけあり、かなり強そうだ。装備からおそらく術技主体の近接戦闘タイプといったところだろう。

フォンスさんは、22・3歳位か。蒼い髪とグラマラスな容姿ではあるが、瞳の底には鋭利な戦士の光が見え隠れしていた。きっと後方支援の回復よりも後方からの攻撃タイプなのだろう。

そう分析すると、俺たちは二人に握手した。

すると、シルヴァさんが俺の手を握った瞬間、好戦的な光を瞳に宿した。

お互い、手にできた肉刺や皮の厚さで大凡の技量を推測したのだ。ああ、訂正…この人バトルジャンキーだ…。後で挑まれるだろうな！…面倒くせえなーと考えたが、稽古だと思えば丁度いいかと思いなおす。すると、プラヴィアさんが、

「ふっ…。道中楽しくなりそうだな…。お前たち！出発の準備だ！キリキリ動け!」

いや、楽しいのはシルヴァさんだけだと思います！心の中で反論する。

前半は俺にしか聞こえない音量だったり、何やら剣呑な雰囲気だっ

たりで何故か溺愛する娘の父を幻視した。

しかし、その雰囲気はすぐに消えて大声で隊に号令をかけると一斉に慌ただしくなり、1時間ほどで出発の準備が整った。

「さあ、行きましようか。王都シルウエストリスへ！」

ステラが言うと、俺たちは馬車に乗り込んで一路王都へ出発した。

車内では、俺の正面にミオとステラが座っている。

「なあ、ステラ。王都までどのくらいかかるんだ？」

「そうですね…。往路は魔獣が出ませんでしたから1日で着きましたが、復路で魔獣に遭遇すると予想すれば2日程度でしょう。」

意外と遠いんだな。と思うが、馬車の速度は自転車並みの速度しか出ていないからその程度だろう。日をまたぐ事になった場合は、野営することになるのだそうだ。

「そうか。こんな苔むした石畳の古道じゃそんなもんか。それじゃ、少し寝かせてもらおうわ。休憩地か野営地についたら起こしてくれ。おやすみ。」

という、一日の内に濃密な時間を過ごして疲れていたのか瞼を下ろすと直ぐに眠りに落ちた。

馬の嘶き（いなな）で起こされると、辺りは黄昏時だった。

俺は、ステラと話してこんでいたらしいミオに状況の説明を頼んだ。

「私もよく分からないけど、気配からすると3、40匹ぐらいの魔獣に囲まれたみたい。この隊は60人編成だけど、んゝ…少し手こずってるみたいだね。どうする？」

「分かった。ミオはステラの護衛を頼む。俺は隊の加勢に行くぞ！」

「了解！シルヴァさんとベナスタスさんは隊の前方と後方にいるみたいだから、アーダルは中央を担当した方が良さそうだよ」

山での修行中も思ったが、こういうときはミオの特技の一つである広範囲探知能力ソナーにはホントに助かる。

「分かった。俺もここからあまり離れる気はないから好都合だ。じゃ、危なくなったら直ぐに呼べよ！行ってくる！！」

そう言うと、俺は馬車から飛び出し目の前に躍り出てきた猿みたいな魔獣を切り裂いた。

どうやら既に防衛ラインは突破されつつあり、こちらに魔獣たちは

向かってきているようだった。

「くっ。隊の中心を空洞にしてどうするんだよっと!!」

間髪入れずに、二匹目が飛びかかってくるが今度は胴薙ぎの一閃で真っ二つにした。

魔術師と騎士の混成小隊は皆前線に向かっていたのだ。

「あんなに出たら、突破されたときに魔法撃てないし騎士たちも間に合わないだろうに…」

と、部隊内の練度の違いに疑問を感じた。

「シルヴァさんとベナスさんと一部の人たち以外は、明らかに戦闘慣れしていないな。なんか、嫌な、感じだっ!」

そう呟く間に三匹を切り伏せ。合計5匹を討伐したところで、戦闘が終わったようなのでカードを回収し馬車に戻った。すると、シルヴァさんとベナスさんがこちらに来て焦ったようにステラの安否を確認しに来た。

「姫様!! お怪我はございませんかっ!!!!」

「ステラっ!! 大丈夫?!?!」

すると、当の本人は何事も無かったように笑顔で言った。

「大丈夫です。アーダル様とミオさんにも助力していただけましたから。」

しかし、俺は微かに震える固く握りしめた手を見逃さなかった。

（これは、襲撃に対する恐怖ではないな。何かあると考えた方がいいか。後でミオと話そう。）
そう決めると、俺はシルヴァさんとベナスタスさんに疑問に思った事を尋ねた。

「隊の練度にかかなりの差があるようですが、なぜ皇女の護衛にこんな危ない編成を？あなたの方が統率する団員なら実力は貴方に劣るとしても、此処まで差が出ることも無いでしょう。どういうわけかお教え願えますか？」

すると、二人はステラに同意を求めているような視線を向けると、ステラは軽く頷き、二人は苦虫を嚙潰した様な表情で語りだした。

「実は、聖国アルフは代々女王が王位を保有するしきたりで、次期王位継承権を持つ第一皇女派と第三皇女派で内政が分裂しており、第一皇女派は事あるごとに姫様を排除しようと試みてくるのです。第一皇女様と姫様同士は仲がよろしいのですが、第一皇女様を推している野心家の宰相が姫様の排除を目論んで居られるのです。しかし、狡猾で確たる証拠がなく政治手腕もかなりの実力のお方なので罰する事も出来ずにいるのです。」

「そうなのよねえ。これは上層部と一部の隊員しか知らない事だから他言しないでほしいわ。私とシルヴァは姫様が幼少期の頃から御側にお仕えしているから姫様のいい所も悪い所もよく知っているのだけど、利権に目が眩んだバカな大臣やそれに呼応した他の隊の連中は、ステラには見た目と序列が王妃に適さないと考えているのよ。第一皇女様が即位して宰相なんかが実権を握ったら、今までの南大陸の他国との良好な関係が崩れるわ。だから、私達や第三皇女派の国を思う大臣達はステラを推しているのよ。」

「そう言った事情で、今回の旅も宰相が護衛にそんな人数は避けな
いとか抜かしておつて、第二から第六までの五隊が残つて居るのに
も関わらず、王宮警護に足りないとかぬかしおつて第一聖騎士隊と
第一魔術師隊の大半を王宮警護に回したのだ。それに文句を言つた
ら今度は新人をその穴に充ててきたのだ。」

はあ…ずいぶん厄介な事を聴いてしまったな…。

そう思い、ミオの方を見るとやはり瞳に火が灯っていた。

こいつは昔から普段は人見知りな癖に、一旦友達認定するとうるさ
い位絡んでくる。そして一度友達^{ひとたひ}認定すると一緒に
巻き込まれるという厄介極まりない性格の持ち主なのだ。俺は毎回そ
れに付き合わされ、頭脳労働から体力仕事をこなしてきた。これは、
またスイッチが入ったか…と頭を抱えた。

「ねえ、アーダル。何とかできないかな？ステラこのままだと命の
危険まであるよ?？」

やっぱり、突っ込んでいく気だ…確かに、折角助けた命が危ないの
は何とかしたいが、内政に首は突っ込めないだろう。どうしたもの
か…と、助ける方向で考えてる俺がいて自分に嫌気がさす。

「はあ…今の段階では、身辺警護が関の山だろ。助けるにしても、
もつと情報を集めないとはとも出来ん。」

前向きに考えてる俺に喜んだのか、ミオは嬉しそうな顔で、

「やっぱり、アーダルだね！よし、そうと決まれば王様と王妃様にも
会わないと！！ステラ、頼めるかな?？」

えっ！つと、ステラは驚き、シルヴァさんとベナスタスさんも目を

点にしていた。

「あー、ステラにシルヴァさんにベナスタスさん？こいつがこう言
いでしたら止まりません。身元も不明な俺達で信頼はまだされてい
ないでしょうが、すみませんが首突っ込ませてもらいます。」

シルヴァさんとベナスタスさんは、まだそこまで信頼はしてくれて
いないだろうがそれでいいと思う。一度や二度助けたくらいで信用
していたらスパイが入り放題だ。

一方、ステラは申し訳なさそうにしていた。

「アーダル様やミオさんまで危険に晒される事になるんですよ？い
いんですか??」

…と聞いてきたが、ミオのスイッチが入ったら俺にはどうする事も
出来ない。この幼馴染は、俺が居なくても突っ込むし失敗すれば俺
が何とかする事になると経験から分かっているので、最悪の事態に
ならないように最初から手綱を握るしかないのだ。幸い、手綱を取
れば言う事を大体効くので問題が大きければ大きいほど、早い段階
で巻き込まれることにしたのだ。

そんな様な事を説明すると、納得してくれたようだ。

「ありがとうございます…す…。」

消え入りそうな声でそう呟くと、しばし後ろを向き肩を震わせてい
た。

大人たちの中で、同年代の友達もいなく何年も一人で頑張ってきた
のだろう。俺やミオがステラの力にどれだけなれるか分からないが、
出来る事はやろうと心に決めた。

暫くして、落ち着いた様子でこちらを向くと、

「お見苦しい所をお見せして申し訳ありません。それではもう夜になりますので野営の準備を始めましょう。シルヴァ、ベナスタス、宜しくお願ひします。」

「はっ！！かしこまりました！！お前たち、薪拾いとテント、釜戸を準備しろ！！！」

「りょーかい！あなた達、ここら一带に結界の準備！釜戸が出来次第、火を使える者は調理の準備！その他の者は明かりと、周囲警戒！通信班は王都に定期報告をして頂戴ね！！！」

慣れた様子で指示を与え、暫くすると夕餉の準備が整った。薪拾いに行った班がイノシシと鹿を捕ってきたので、ボタン鍋とシカ肉の炭火焼きになった。

ステラも隊員と一緒に夕餉を囲み、和気あいあいと楽しい時間を過ごした。

とても楽しそうなステラを見てるとふと疑問に思ったのでシルヴァさんに聞いてみた。

「王族が隊員と同じものを同じ場所で食べていいんですか？誰かが回し者でステラの食事に毒を入れたりとか危険が尽きないと思うのですが。」

「確かに、一般的にはしないな。特に第一皇女のプラヴィア様なんかは隊員などとは口すらきかないからな。それはそれで護衛はしやすいのだが、姫様のように下の者との輪に入り隊員が好感を持っては士気が上がるし、見聞が広がる。それに王都の外に公務などが出るときは、害意あるものが姫様に触れると激痛が走り、毒などのモノ

なら消滅する魔法が王妃様により掛けられておるし、姫様自身判別の魔法を掛けてから食されておるよ。しかし、魔獣などの瘴気を纏ったものにはそう言った魔法は効かないのだ。だからこそその私達というわけだ。」

なるほどな。二重三重に策はこらしているわけか。

そうひとりごちて礼を言つと、いきなりステラが肩に手を置いてきた。

「うおっ！ステラか！！気配消して近づくなよ…ってか、その隠遁、ミオに教わつただろ？」

「はいっ！！上手く出来たみたいで嬉しいです！」

たった一日で、よくそのレベルまで習得したなーと、驚いたが今の何気ない動作が今話に出ていた判別の方法だと気づくとステラの抜かりのない一面を垣間見た気がした。そして、ミオの所へ帰って行きハイタッチなんかしていた。

すると、それを見ていたシルヴァさんが俺たちが何ともないのを確認して安心したのかニヤニヤしながら少しくだけた感じで話しかけてきた。

「気付いただろ？姫様は、頭がキレる方だし思慮深い。そんな姫様が俺以外では初めて自分から強く関わろうと思うほど興味を持ったのがお前たちだ。まあ、歳も近いという事と託宣に関わりある人物というのもあるだろうが、いまだ怪しい人物に姫様を任せるわけにはいかん。ミオ殿はお前の言う事を聴いているようだから、王都に着いたらお前が俺と手合わせしろ。」

覚悟はしていたが、よりもよってシルヴァさんか…これは厳しい

戦いになるだろうな。と凹んだが、もう誰かと当たることは覚悟していたことだし断る訳にもいかない。

「分かりました。全力でお相手させて頂きます。」

そういうと、初めてシルヴァさんが笑い。明日は早いから寝るといい、自分のテントに入って行った。

そして、その笑い声を聴きつけたベナスタスさんがこちらにきた。

「シルヴァがそんなに笑うなんて珍しいじゃない。なんかいいことでもあったの??」

そして、俺の隣に腰を下ろすと俺にすり寄ってきた。

男としては嬉しいが、鼻をくすぐる甘い香りや柔らかい感触、目のやり場に困る服装で心中穏やかじゃなかったが勤めて平常心で返答した。

「いえ、シルヴァさんに王都に着いたら試合をしてほしいと言われたので、お受けしただけですよ?」

と、答えるとベナスタスさんが驚いた顔をして、貴方魔法は使えるの?と聞いてきた。

「いえ、まだ使った事はありませんか?」

そう答えると、

「それでシルヴァに勝つなんて無謀よ!!それなら、今から特訓しましょう。ステラに気に入られた貴方が負けるのなんて見たくないし、勝ってほしいのよ!!」

何故か凄い気迫で急遽特訓が決まり、俺やミオも誰かに教えてもらおうと思っていた為丁度良かった。ミオも呼ぶと早速特訓を始める為野営地の外の森の中に入って行った。

「野営地から大分離れましたよ？」

暗に、まだなのかと不満の声を上げる。

「もう少しよ。魔華が咲いているところがこの先にあるって花の精霊が教えてくれてるの。」

魔華って何だろうかと疑問に思いながら、更にそれから10分程歩くと暗い森がいきなりぽつかりと開けた。

そこでは丸く切り取ったような夜空が覗き、始めて見る異世界の星空にとても大きな輪を持つ惑星が浮かんでおり、背景には無数に煌めく大小様々な色の星が散りばめられていた。

また、地面は隙間なく膝丈の輝く草で覆われていてその中に分け入ると草の揺れにあわせ、光の粒が空に向かって落ちる雪のように舞いあがった。

俺たち二人はその光景に言葉を失い見蕩れていると、ベナスタスさんがゆっくりと穏やかな声音で話し始めた。

「此処は、自然界に漂う魔素を取り込んだ草花が密集している場所なの。そして、この光っている草花が魔華と呼ばれているの。魔法を使うためには、一般的には最初にこういった非常に濃い魔素を肌で感じて、次に自分の内にある魔力を感じ取るの。どのくらいの魔力量とかどういった魔力の流れがあるのかとかね。そして、次に魔素と魔力を混ぜる。こんな風にね。」

そう言うと、ベナスタスさんの手のひらに青色く光る珠が浮かび、それに吸い寄せられるように辺りから光の粒が現れて珠と同化していった。

「これには自分のイメージを合わせて発動点を指定して始動するの。こんな風に…ねっ！」

そうやって空にその珠を打ち出すと空中で弾け、この広場を覆い尽くす巨大な薄い青色のドーム型の魔法陣が出現した。

「この中では、常に体力が回復するわ。それに、自分の中に意識を集中しやすくする効果があるの。因みに、この魔法は『詠唱破棄』と『リヴァイブ』スピリタス『ウィニエルスム』という魔法よ。効果は地味だけど、これでも上級魔法なの。魔法を使うには、まず使用する魔力と混ぜる魔素のバランスと詠唱が必要になってくるの。バランスが良くないと発動しないし、発動してもとっても効果が悪くなるの。詠唱は発動の元になるイメージを固めて、威力を補強するために必要なのよ。確固としたイメージがある場合は『短詠唱』や『詠唱破棄』も可能よ。今回は、一番成功しやすい身体強化系の魔法を覚える所までやりましょう。」

それじゃ、魔素と魔力を感じるところから始めましょう。その一言で、俺たちは魔力を感じ取る為に目をつぶって集中した。心が静寂に包まれたときに、ベナスタスさんからアドバイスをもらった。

「まずは、自然を感じて。風とか音とか…そう言った外の様子を肌で感じるの。そうすると違和感を感じるはずよ。それは人によってバラバラだけど、肌がピリピリしたり吹く風の中に温度の違いを感じたりね。どうかしら？」

すると、俺は真っ暗な視界の中に、テレビ番組でやってたシャトルから見た地球のようにバカでかい白い光の塊とその周りに星のようなモノが浮かんできた。何だこれ？と思いつつも大きい白い光の塊の方から懐かしい感覚がしたので、両手で抱き締めるようなイメージをすると急に体が暖かくなり光り出した。

俺は自分の変化に驚いていると、ベナスタスさんも驚いて指示を出して来た。

「なっ…！なんて魔力量なの！！一旦、魔力を閉じて！！」

閉じる…？そう言われてもよく分からなかったが、あの白い光を抱きしめるイメージでこうなっただから離すイメージをすればいいのではと思ひあたり、やってみると成功し元に戻った。

「い、今のが貴方の魔力よ…。全身が光って周りが歪んで見えるほどの魔力量なんて初めて見たわよ…」

どんな感じだったの？と、聞かれさっきの状態を説明する。

「そう…、外と内で大きい方の魔力を違和感として感じるんだけど、

普通はこの魔素の濃い空間よりも自分の魔力が小さいから外の違和感を始めに感じるのよ。貴方は逆の様だけど。おそらく周りの星みtainなものがこの場の魔素でしょう。」

そう言つて、今度はミオの方を見やった。

するとミオの周りに光の粒がおびただしい数現れていた。ベナスタスさんは、なっ！！と、驚きいて慌てた。

「魔素の集束をとめて！！」

すると光の粒が消えていった。
どうしたのかを聴くと、

「うーんと、まず私の足元に光つてる池があつて凄いいっぱい雨みたいのが降つてたの。それを体いっぱい浴びようとしたんだよ。」

それを聞いたベナスタスさんは、

「貴女は、魔素を集める力が凄いですね。魔力は普通の魔術師よりも魔力は少し多い位でしょう。それにしても、あなた達二人には驚かされっぱなしね。感覚を掴むだけでも、遅い人は1週間位かかるのよ？それをあなた達はものの10分程度で感じ取るんだから…この調子でいけば初級魔法程度は行けるかもしれないわね！」

そして、身体強化魔法に移ると『アクセラレーティオ』、『プロテクトイオ』を取得し、思いの外出来が良かったらしく次に初級魔法の『イグニス』、『アクア』、『ウエントウス』、『テツラ』を取得した所で空が白んできた為、お開きになった。

野営地に戻る道すがら、ベナスタスさんはぼやいた。

「あなた達見てると、大抵の魔術師の苦勞がむなしく思えてくるわね。天才なのかしらねえ。」

「嫌だなあー！ベナスタスさん！！ここから先は魔法陣とか詠唱理論とかも覚えなきゃならないんでしょ？私なんか座学苦手だから苦勞すると思うよー！！」

「ミオ…、それ胸張って言える事じゃないだろ。」

俺は呆れたが、魔法に興味を持った時点で物凄く勉強するんだろうなと予想がつく。

「それでも、あんな短時間に二人とも身体強化2つに4大属性魔法を初級だとしても修得するんだもの。しかも、ミオは魔法の使い方が抜群だし、アーダルは初級なのに中級並みの威力なんだもの。自信無くす…。」

まずい、目が据わって来ている…。

俺は、話題を変えた。

「そういえば、昨日はあんなにくっ付いてきてこの歳には刺激が強すぎましたよ。お酒でも飲んでたんですか？」

そう言うと、赤くなってしどろもどろで答えた。

「そ、そ、そうだったけえ〜？魔法、お、教えなきゃって気持ちが強かったから、お、お、覚えてないなー！！！！」

すると、野営地が見えてきたのでベナスタスさんは、眠いから先に

行くね！と、言い走って行ってしまった。

それを見ていたミオは、俺のほほをつまんで言った。

「この顔かつ？！？！この顔が女を自動で引つ掛けるのかつ？？見るとイライラするから原型がなくなるまで殴ってあげようかしら？？」

俺は、ミオの頭を叩き攻撃から逃れると、そうと決まったわけじゃないのに先走るなっ！と、一喝した。

が、恐らくあの反応はそうだろうなーと思い、どうすべきか考えている内に野営地に着いたら騎士たちがもう起きていて、撤収作業をしていた。

俺たちは邪魔になると判断して、馬車に乗り込み寝た。

大分、疲れていたのだろう。目を覚ましたら王都間近だと言うので外を見ると、さっきまでの森の木よりも何倍も高く高い木々が生い茂り、まるで小人になった気分だった。道の先には、長い橋とかスロープみたいなものが、周りの何本かの大樹を経由して奥にある一際大きな木の中腹辺りに向かい延びていた。それは道幅と同じぐらいで10m位で高低差は20m程度、長さは500m程度はあ

りそうだった。

ステラ達エルフは樹上で生活しており、王都はスロープの先の何本もの大樹すべてが素晴らしい。

大樹の周りには木組みでつくられた幅広のデッキが幹の中腹から上に向かって螺旋状に巻きつき店や貴族の家は木を切りぬいて使用していて、平民は大樹の枝などに家を建てて暮らしているらしい。大樹の頂上には竜籠という空飛ぶ大型の馬車の様なものがとまっいて遠距離を旅する時に使用するそうだ。

また、そういった街を形作る何本もの大樹は中心が空洞になっており、緊急時には避難通路になっているなどかなり計画的に街が形成されている。

そんな解説を聴きながら外を見ると、軽いパレードの様だと気付く。

それを尋ねると、託宣の旅は未来の道標になると期待された旅で王族が直接出向く事や民衆の評判もいいステラだからこそパレードのようになっているそうだ。

流石、お姫様だなーと感心していたがこれから王と王妃に謁見する事を思い出し、礼儀作法を聴いた。

「え、アーダル様やミオさんのご実家って貴族とかじゃないんですか？神殿での挨拶は堂々としていて立派でしたし雰囲気からもそうだと思います。」

まあ、この世界の文明レベルより進んだ世界で育ってきたから、この世界の学者並みの教養はあるだろうけど礼儀作法なんて知らないぞ？

「大まかな礼儀作法と、しちゃんいけない事を教えてくれ。あとは、何とかする。」

そう言つて教えてもらい、大体理解した所で王城に着いた。

王城は三本の大樹の一番奥にある王都で一番大きな樹は王樹と呼ばれているそうで、その王樹に嵌めこまれるかのように築かれている白亜の城だった。王城の前のデッキは三本の内二本の大樹に渡して作られており幅・奥行き共に100m程度で広場のようになっていた。

そこに馬車と、護衛隊がとまると馬車と馬を世話係らしき人たちが出てきて連れて行った。

俺とミオとステラは、シルヴァさんとベナスタスさんの間に挟まれながら謁見の間に向かった。

天井まで5、6mはあり床も壁も大理石で作られている通路を歩いて行くと、天井いっぱいまである扉の前に来た。扉の両脇には、警備の兵が二人付いており俺たちの来訪を告げると重々しい音を立てながらドアが開いた。その先には、大臣や貴族といった面々が集い

俺達を好奇の視線で眺めていた。

シルヴァさんとベナスタスさんは謁見の間に着くと、俺たち三人の後ろに移動しステラを先頭に玉座の階段の前5m位のところで片膝をつき、頭を垂れた。

「ステラ大儀であつた。面を上げよ。」

はいつ！ 労いのお言葉痛み入ります。と、返事をするそのままの格好で顔だけを上げた。

「では、こ度の報告と後ろの者達の紹介を頼めるか？」

すでに、昨日定期報告の時に粗方伝え終えているそうだが、王妃は直ぐに今回の旅の結果を皆の前で示すことで、ステラの立場の維持と俺達がステラの友人兼護衛として認めさせる魂胆だろう。

ステラは事の経緯と俺達の働き素性を述べると、王妃は今度シルヴァさんとベナスタスさんに俺達の技量を聴いた。

シルヴァさんは俺と手合わせしたい為か、自分が証明するような事をいい御前試合を取り付けていた。

ベナスタスさんは徹夜の魔法特訓の事を話すと、周りからどよめいた。

大体、三人が俺達の話を終えた所で俺達の番が来た。

「ヴェラス様、プラキドウス様、面をお上げください。私は王妃のアウラハルシオンシルウエストリスです。こちらは王のベリタスベントウスシルウエストリスです。こ度はステラの救出と道中の魔物撃退線への助力、感謝いたします。褒美を与えたいと思う

のですが、何か希望は御座いますか？」

「勿体ないお言葉、有り難うございます。それでは、お申し出を有りたく賜りたいと存じます。希望は二つ御座います。まず一つは、魔法学院に入学するに当たり後盾になって頂きたいです。私達の流派の都合上、まだギルドに加盟する事は許されておりませんので、入学したくても出来ない状況でしたので強い魔獣を倒しギルドの保障だけでも発行してもらおうと思っていたのですが、ギルドに厄介になるよりはどなたか有力な方に後盾になって頂ければ、流派の規律に底触する心配もありませんのでお願い致します。二つ目は、第三皇女様の友人として御側にいる事をお許し願いたいです。これは、私達二人の総意であります。」

「分かりました。その二つの希望をかなえましょう。ところで、あなた方は討伐したマーブルタイガーのカードをお持ちですか??念のため拝見させて頂きたいのですが。」

こちらです。と、カードを見せた。

「これは…、マーブルタイガーをお二人で20秒で討伐。しかも、このマーブルタイガーはかなりの大型ですね。分かりました。問題ないでしょう。そして、これは王とわたくしからのお願いと提案なのですが、ステラの護衛もお願いしたいのです。お引き受けいただければ、魔法学院への出発までの一ヶ月間は王城でわたくしの客人としてお招きいたし、お部屋も自慢のモノをお使いいただきたいのですが如何です？」

「重ね重ね、身に余る光栄。私ども謹んでお受けいたします。」

「王もわたくしも嬉しく思います。それでは、しばしの間ゆっくり

としていつてください。また、お呼び立てすることもあるかと思いますが、その時はどうぞよろしくお願い致します。」

そう言われ、謁見は終了した。

あてがわれた部屋に着くと、早速風呂に入りサッパリするとベットに横になりいつの間にか眠ってしまった。

起きると、もう暗くなっていてバルコニーに出て眼下に広がる街を見ると幻想的な明かりで照らされた街が浮かび上がり、何とも言えない美しさを醸し出していた。

そんな風景を暫く見ていると、ノックがして夕飯のお誘いがきた。身支度を整え、メイドに連れて行かれるとステラと王と王妃、それにミオがいた。

「お呼び立て、有り難うございます。」

俺は、入り口でそう一礼すると引かれた椅子のある席に向かった。

「アーダル殿、この場は私的なものだ。そんなに畏まらなくても良い。」

王が気さくにそう言うと、王妃もそうですわ。と、王に賛同し見つめ合っている…。

ステラが軽く咳払いをすると、こちらに再度意識を向けた。なるほど。相当仲が良いみたいだ。

「有り難うございます。では、そのように。」

「そうだぞ。肩肘張ってはその人の人となりは伺いしれん。特に私は二人の“本当の姿”を知りたいのじゃ。なあ、アウラ。」

そう言うと、気のせいかもしれないが瞳の奥に探るような色が見え隠れした気がして、意外と鋭いお方なのかもしれないとイメージを変えた。もしかしたら、このお方は俺たちの出自について何か気付いているのかもしれない。

「ええ、その通りです。もっと親しく話してもらえると嬉しいわ。確かに私達は王と王妃という立場だけど、今はステラの両親という面の方が強いんですもの。魔法学院に今年から入学するのですからステラと同学年になる訳ですし！！娘の友達にまでこのような私的な場で肩肘張りたくないですわよ。それに、初めて娘が興味を持った殿方ですもの。私達も良く知りたいわ。」

「ちょ、お、おかあさま！な、何を言ってるんですか?!?!」

「んっ…!!げほっ!!それは誤解を招く表現だと思えますが…。」
俺は危うく、飲んでいた葡萄酒を吹き出しそうになった。どうやらステラの前にも同じものがあるあたり、この国の16歳は酒を飲んでも良いようなのだ。

「そ、そうだぞ、アウラ。未だ早い!!」

「えーっ!!ステラ位の歳になったら、異性には興味持ってもらわないと困るわよ。」

「もうっ!二人とも!!その話はもういいじゃないっ!!」

と、ステラが普通の女の子のように叫んだ。顔を赤くしながら…。

「…そ、それにしても、王と王妃って私的な場でも畏まるモノだと思っただけだから意外です。これならミオも喋っても大丈夫そうですね。ミオ、もういいぞ。」
俺は、急いで話の舵をきった。

会話の雰囲気から、多少の無礼は許されると判断した。

ミオは、こういう畏まった場はかなり苦手だ。借りてきた猫のように静かになって、俺と一緒にいる時は俺としか喋らなくなる。今の容姿でそう物静かだと、深窓のご令嬢という雰囲気だ。

地球にいたころも誤解されて色々な男に付きまとわれた結果、家族や俺が対外的な会話を引き受けていた。しかし、畏まらなくてもいいと判断した場合は元の調子を取り戻すのだ。

「ぶはあゝ…。緊張したあゝ。でも、これから私的な場なら普通に喋っていいんだよね！！良かった！！1ヶ月間も緊張しっぱなしって耐えられないと思ってたよ。」

そう言うと、テーブルに突っ伏した。

「はははっ。ミオ殿は意外と活発な感じなのだ。それにステラの話では相当に腕が立つとのこと。見た目では判断できんものだな。私もまだまだだな。」

「いやー。流石に国のトップと話した事なんてないですし。しかも、食事まで一緒にするなんてどうしたらいいのかサッパリでしたから。」

あ、それと私達に“殿”は要りませんから！！と、付け加えた。

「分かった。それでは私もベリタスと呼んでくれ。王妃もアウラで良からう。」

ええ。と、王妃が同意した。

「しかし、さつきもアウラと話していたんだが、アーダルのこちらの意図を掴んだ受け答えや度胸は素晴らしいな。どこかの王族か貴族と話しているようだった。本当に平民なのか？」

「はい。恐らく、そう感じられたのは私達の流派は礼に始まり礼に終わるという教えが基本の一つで、それを叩きこまれた事と、何人も年上の後輩前で技を説いたりしていたからでしょう。」

「まあ、そう納得しておいた方がいいんだろうなあ……」

今の眩きを考えるとやはりベリタス様は何か気付いているようだ。メイドの話では公務の時以外は、書庫に籠っているか、中庭にいるか、自室にいるかのどれかという研究者肌の人物からしい。何か文献でもあったのだろうか……。考えに耽っていると、御前試合に付いての話に移った。

「シルヴァは相当に強いぞ？勝算はあるのか??」

「いえ、正直やってみないと分かりませんね。」

「どうやら、あやつは自分以上の実力の持ち主でないとステラの近くにいる事を快く思わないようなんだ。過保護というか……。あやつには隊長の職に専念してもらいたいのだが、どうもステラを優先するのだよ。親としては安心なのだが、国を預かる者としては困っているのだよ。だから、アーダルには勝ってもらいたいのだ。」

「ええ。そうして頂ければ、学院に向かった後も安心できますから。」

御前試合は1週間後ですから、それまでは修練所をお使いください。

┌

王と王妃はそう言ってくれて俺とミオは使わせてもらう事にした。
それから、他愛ない話をして今日は部屋に戻った。

第2話 王家（後書き）

話毎にページ数が変わるかもしれませんが、暖かい目で見てやってください。

誤字脱字のご指摘、リクエスト、提案、感想等何か有りましたら、気軽にコメント頂けると嬉しいです。やる気に繋がりますし、喜ぶと思います。

完結を目指して頑張ります。

どうぞ、次回もよろしくお願いします。

第3話 御前試合（前書き）

<<PC不調で、途中までのモノしかアップされませんでした・・・
なので、加筆しました！既に読まれている方は、追加したので宜し
くお願いします！>>

どうも、黒猫です。ご訪問有り難うございます。

今回は、御前試合に入ります。アードルVSシルヴァはどのような
戦闘になるのでしょうか。

それでは、どうぞ宜しくお願いします。

第3話 御前試合

部屋に戻って直ぐベットに横になり目をつぶり、次に目を開けた時には空は白んでいた。

こっちに来てから、鍛錬してなかったし少し身体を動かしてくるか。

そう考え、部屋を出ると歩いていたメイドに一人で鍛錬できそうな場所を尋ね、王城の庭の端にある人気のない静かな開けた場所に着いた。

「ここら辺でいいか。下は石畳で耐久力有りそうだし。俺自身、全力がどんなのかまだ理解できてないからな…。」

まずは、精神統一から入り気配感知、足運び、体幹修練、術技訓練と一通りの動作をこなすと、全身に薄っすらと汗をかいていた。

「…ふう。準備はこんなもんでいいか。次は、戦闘訓練つと…」

そう呟くと、俺は一旦気持ちを空からにする為に目を閉じ、腰に差してあつた武器を構えた。

暫くして、心が静けさを取り戻すと突然、頭の中に声が響いてきた。

>>わ…に、…を与…。さ…れば、…を得ら…だ…。<<

俺は、その言葉とものと真剣に向き合わなくてはいけない気がして、心を深く深く静めた。

すると今度はよりはつきりと聞こえてきた。

>>我に、名を与えよ。さすれば、力を得られるだろう。<<

こちらの世界にきてから、魔獣とか魔法をみたり魔華の群生地や聖国の街並みといった美しい光景に目を奪われたりと、地球では有り得ない体験した為、こんな事もあるのかと思つて話しかけてみた。

「誰…というか、お前は何だ。」
まずは、相手を確かめる。…まあ、大方予想はついてるが。

>> ほう…、意外と早く我の声が届いたな…。しかし、何だとは無愛想だな。我を手にして未だ瞬き程の時しか居らぬが、共に戦つた仲であるつに。もう気付いているのであるつ。それが分からぬほど、主の魂は鈍くなかろうに？<<

「…つてことは、やっぱり、お前はこの刀なのか？」

>> カタナ…。ふむ。それが我の様な武器を指すのであれば、そういう事になる。<<

「やっぱりそうか…。名を与えるのは構わんが、名を与えないとどうなるんだ？それに与えたらどうなる？？」

>> 我ら名を忘れられた武器にとっての名とは、新たに存在をこの世界に定着させる為のモノだ。さらに言えば、我の存在を世界に認めさせるもの。故に主の存在は欠かせぬ。主の存在があつてこそ我じゃ。武器は使い手がいなければ存在しないも同然だからな。

名を与えてもらえれば、主の魂と我ら武器が共鳴し合い特殊な力を行使出来るようになる。つまり、我の力を主が引き出すカギになるのだ。付け加えれば、その名が我ら武器のそれぞれの魂の在りように近いほど、強力な力を発揮する。この力を、クリオと呼ぶ。<<

「なるほどな。お前の魂の在り様を示す名かあ…。それを与えれば、クリオを使えるわけか。んゝ…悩むな。」

>>なに、大事なことだが難しく考える事はあるまい。我を手にしてからこんなにも早く、こうして我と意思を交わす事が出来ておるといふ事は主と我の魂の在り様は似ているということ。我らの魂の在り様と対局にあるような名を我に名付けなければイイのだ。<<

「??対極にあるような名前を与えるとどうなるんだ??」

>>名を与えられなかった場合と同じように、剣であれば単なる鋭利なだけの金属になるだけだ。<<

「分かった。そういうことなら名を与えよう。ん…。俺の在り様…魂の属性の事でいいのか?そうだとして、こいつの刀身は白くて刃は透明か。折れたり欠けたり刃こぼれするのは避けたい…。」

>>決まったら、我にどうあってほしいかを強くイメージしながらその名を呼ぶのだ。<<

そして、暫し考え…決めた。

「斬天白光」

そう呼ぶと、突然、鞘と刀全体が光りだし形を変えた。

刀身は約80cm程度で五分反りで、柄は鍔は糸菊の様な形をした立体的な作りになっている。まるで光が迸っている様をデザインしたようにも見える。地肉は白色、刃肉は透明で見る角度により色が変わる。刃文は丁子連れだ。一通りみていると白光が感嘆の声を挙げた。

>>おお……。力が漲るみな！この世に生まれ落ちてから幾星霜、姿を変えるほどに強く魂の力を引き出したのは主が初めてだ。どんな意味を込めたのか教えてもらってもいいか？<<

「ああ。簡単に言えば、天を斬り裂く白い光という意味だ。」

>>なるほど。と、言う事はかなり光の属性に特化した性質をイメージして名付けたのだな？<<

「そうだ。名前を呼ぶときにその他のイメージも色々と連想してしまっただけだな。」

>>そのようだ……。魔法などでも見た事も無いようなイメージが色々と伝わってきたぞ。中でも一番分かりにくいのは『白華光葬』びやくかこうそうとはなんだ？？

我が砕けて光の波になり、相手に向かっていく様が浮かんでくるが
…<<

「ああ、その波は全て刃で光を受けて煌めく。その光に包まれたモノを斬り尽くす技だよ。斬るのを止めるか、斬り終わった後は、元に戻るから白光が壊れるわけじゃない。」

>> なつ…！何とも恐ろしい…。我が砕けた時の最終手段ではなくて良かったわ…。と、言うかそんなものが、主の居た世界にはあったのか？！<<

「いやいや。そんなものあったとしても俺はしらない。ただ、そんな本などは沢山あったんだよ。それを俺なりにアレンジしたものだ。それにしても、イメージが伝わるって恥ずかしいな。名前を付けるときに強く願ったのは、刃こぼれしたり、刀身が折れたりしないで良く斬れるっていうものだったんだが。あとはどこか壊れても自動で修復するとかか。それ以外のイメージなんて、こんな事が出来たらいい程度にしか考えてなかったぞ？」

>> いや、我は言わなかったが名付ける時にどれだけ具体的にイメージを持てるかが重要なのだ。まして、主の様に術の映像や術名まであれば我らはそれが出来るようになる。しかし、主は顔と属性に似合わず、随分えげつないのう。あれか？元の世界では山籠りを良くやって居ったからか？回復やら浄化もあるにはあるが攻撃的なものが多いのは修行や狩猟をしていた為なのか。<<

「まあ、そんなところだな…」

ん？白光、なんで俺がこの世界出身ではない事知ってるんだ？」

>> ああ、そのことか。契約を交わしたから主の記憶や思考ならある程度読めるのだ。それに、ある程度離れていても意思疎通可能だし、例えどれだけ離れていようと呼ばれば主のもとに転移できる。<<

「そうか。白光って凄いな。」

…って、契約？！対価？？って聞こえたが俺は白光に名前以外に何か与えなくてはならないのか！？」

>> 普通なら契約の対価は、名を与えてもらう事・クリオ使用時にその分の魔力を分け与えてもらう事、この二つだ。しかし、主の様にこれだけ強いイメージで形作られてしまうと、何もしなくても一日で並みの魔術師の保有魔力は枯渇するだろうな。ま、主ほどの魔力なら関係ないわ。 <<

「持つてるだけで魔力吸われるって、妖刀じゃないか…。」

>> 失礼なっ！！確かに説明しなかった我にも非はあるのが、基本性能が上がって絶大な威力のクリオが使えるのだから安い買い物だろう！！主は、寝てしまえば直ぐに回復する程度じゃ。我は他の者に使われる気も無い故、せきゅりていーとか言うのにもなっていないだろうよ。それを…よりもよって、我と対局の閻属性のモノと同列と言う等、冗談でも許せんわ！！謝罪を要求する！！！！ <<

この世界の武器って皆、こんなに我が強いのか…?? まあ、でも確かに俺も大嫌いなドブネズミと同列に見られたら嫌だから謝っとくか。

「わかるかった。以後は言わない。」

じゃあ、早速だが斬天白光。お前を使った術技を試す。どんなものなのか使ってみなければ分からんからな。」

>> 了解した。しかし、術技がどんなものを体感するのであれば、この場所は都合が悪いな。もっと広く誰もいない場所でないかと巻き添えを作らんとも限らん。 <<

「そうか…。それなら、あとでステラにいい場所がないか聞いてみよう。ついでにミオも誘って名前を付けさせるか。」

>>まだ眠っている可能性もあるがな。しかし、主の番なら、そちら側からの呼びかけにも応じるやもしれん。試してみると良い。<<そうと決まれば、一旦部屋に戻って汗を拭ってさっさと朝食をとってステラとミオのところに行こうと考えた。

部屋に着いて、汗を拭っていると昨日と同じメイドさんが呼びに来た。どうやら俺付きのメイドとのこと。歳は大体20歳くらいでリヤーナというらしい。種族はヒューマンだった。これから朝餉の場所へ連れて行ってくれるらしく、昨日と同じように後ろについて歩いていると、夕食時に通った道ではない事に気付いた。

「すまないが、これから何処に向かうのだ?」

「はい。レディアント第一皇女様、ルーセント第二皇女様、ルクス第三皇女様の連名で朝食の招待がありました。その為、星集いの園へご案内いたします。」

「はっ?!何故?」

「恐らく、ルクス様が第一・第二皇女とのお話の中でアーダル様のお話が出たものと思われませう。」

「ステラは良いとしても、第一・第二皇女かあ…緊張するな。」

そうやって独りごちていると、階段をのぼっていつの間にか城の間辺りにある庭の様な所に出た。

「この通路を進み庭園の奥にある広場が星集いの園です。王族とそ

の招待者のみ入る事が出来ますので、私はここでお待ちしております。」

此処からは俺一人かと思っていると、後ろからミオがやってきた。

「アーダル！おはよう！今朝は早速外で修練してたね！！途中で刀が光って形が変わってたけどアレになっ！？」

こいつも意外と早起してたんだな。しかし、アレを見られたとなると他にも見られたと考えた方が良さそうだな。用心しよう。

「アレは後でミオにも教えるよ。どうやら俺たちなら簡単に出来るみたいだ。」

「ホントっ！！やったー！！武器が変形するなんて、夢みたいだよ！！あー楽しみだなー！！」

さ、行くぞ。と言って星集いの園へ入って行った。

「あつ！アーダル様。おはようございます。昨晩は良くお休みになれましたか??」

通路を進み、庭園の奥にある広場に出るとステラが駆け寄ってきた。朝から良い笑顔だ。俺は自然と笑みを浮かべながら朝の挨拶をした。

「おはよう。ステラ。良く眠れたよ。ところで、もう友達なんだか

ら敬語は止めないか？その方が俺も気が楽だ。」

そう言うと、ステラは頬を赤らめながら、小さい声で…わかりました。と呟いた。俺は何かしたのだろうか？

すると、ステラは次にミオに挨拶し姉のところへ戻って行った。

「はあ…、異世界でもアーダルのキラースマイルは健在かあ。むしろ拍車が掛ってる！女っ誑しめ！！」

「いや、どうしたもんかなあ。ステラは同世代の男になれてないだけだと思うんだ。それに、俺らは外見こそ高一程度だけど地球では21だぞ？ちよつとキツイだろ。」

「アーダルの守備範囲なんて知りませんっ！！」

ミオは大胆でさっさと歩いて行ってしまい、仕方なく後ろから歩いてついて行った。

そして、東屋に着くと三人とも立ちあがったので挨拶をした。

「はじめまして！！第一皇女様、第二皇女様！私はミオっプラキドウスと申します。ステラとは友達をさせてもらっていますのでヨロシクお願いします！！」

「お初にお目にかかります。私は、アーダルっヴェラスと申します。第一皇女様、第二皇女様にこの度朝食を一緒にさせて頂く機会を頂き大変嬉しく思います。以後お見知りおき下さい。」

ミオは砕けた感じ、俺は畏まった感じで向こうの出方を伺うと第二皇女様が口を開いた。

「ミオさんと、アーダル様。お初にお目にかかります。私が聖国ア

ルフ第二皇女のルーセント・ルナ・シルウエストリスと申します。聴けば、ステラのご友人とのこと。私の事は、どうぞお気軽にルナとお呼び下さい。」

とても、可憐な笑顔で挨拶をした。ステラが可愛い系美人ならルナ様は清楚系美人だろう。ステラ同様の白磁の様な肌に服の上からでもわかる豊満な胸。世の男性が見たら黙っていないだろう。歳の頃は18位で、体型はすらつとしている。

「ご丁寧に有り難うございます。」「ありがとうございます！ルナ様！！」

そう俺達が答えると、ふふっ。と微笑んだ。ステラの笑顔も良かったが、ルナ様の笑顔には色気が追加されておりパーティーなどがあれば社交界の華といったところだろう。次に、第一皇女が挨拶をした。

「お初にお目にかかる。私が聖国アルフ第一皇女レディアント・ルミナ・シルウエストリスだ。妹が世話になった様で感謝する。貴行からも学院に入学予定と聞いたがそうだったら妹の事をよろしく頼む。」

レディアント様は、抜群のスタイルだが力強い雰囲気を持っている。歳の頃は19歳位だろう。今はドレスを着ているが、戦時になれば自分が先頭に立つタイプだろう。所作に無駄がない。こちらの技量を探るような眼で見ているので、軽く剣気を飛ばすと、眼を見開き驚いたかと思うと今度はおもちゃを見つけたような眼で見てきた。気付かないふりをして、俺達は返事をした。

「大丈夫です！私達は友達の事は体張つても守りますから！！」

「こちらこそ過分なお言葉痛み入ります。」

そう一通り挨拶すると、ステラが食事にしましょうと言って朝食を食べ始めた。

女性四人のなかで男一人というのは変に緊張する。

しかも、斜め前に座るレイアント様は時々殺気を飛ばしてくるし、右隣のルナ様は事あることにすり寄ってくる。それを牽制するかのよう左隣のステラが動き、その隣のミオがステラをサポートという落ち着いて飯が食えない状況に陥っている。

そうこうしていると、派閥争いについての話題になった。するとレイアント様が現状について話し始めた。

「ステラがアーダルはシルヴァとベナスタスから現状を聞いたと言っていたが、私としては姉妹三人で上手くやっていきたいと考えておるのだ。

私は実は今、聖国翼竜部隊の一番隊長を担っている。将来的には翼竜部隊の将軍になりたいと思っておるの

だ。しかし、そう思っただけで励んできた事がここにきて裏目に出ている。私のランクは先の魔族との戦いでSSSになったのだが、そのお陰で私より強いものがこの国にはいなくなってしまった。と、同時に結婚相手がいなくなり嫁いで王位継承権を破棄する事が出来なくなってしまった。と、言うのもこの国では女を娶る時は男はその者より強くあらねばならないという慣習があるのだ。その為にこの方法は諦めていた。

それで、もう一つの手段である貴族院の3分の2を継承権破棄に賛同させようと動いてきたわけだが、4分の3以上の勢力を有している宰相派がそれを阻止し、尚且つ翼竜隊に多額の資金提供をしている為に私も強く言う事が出来ない…。

そんな私と違い、ステラは調整力や政治的判断力もある。その上、女王の資格の一つである託宣の力を宿している。だから私はステラ

が女王になる事が一番だと考えている。

そこで、折り入って相談なのだが、アーダルは先ほどから私の殺気などの挑発を受け流したり相殺したりしているが、そんなことは技量が同等かそれ以上でなければなしえない事だ。ゆえに、アーダルは私より強いかそうでなくとも同等の力を有していると考えた。

故に、我と婚約してほしい。」

「…はっ???」、「…へっ?」、「…まあまあ。」、「…お、お姉ちゃんっ!?!?!?!?」

今の発言は、俺達を一瞬静寂の中に叩き落とすには十分だった。特に俺などは、皇女からプロポーズされたときどうするか、なんて言うレアケースほとんどかんがえていなかった。

だから、俺は足掻いた…。敬語も何も気にせず。その会話の一部がこれだ。

「いや、身分が違いすぎるでしょう?!」「私の親はこの国のトップだぞ?? 爵位など今回のステラ救出で与えることなど可能だよ。」

「それじゃ、歳が違いすぎるでしょ??」「ほう。年上は好みではないか。私は一向に気にしないが。ならば側室をもてよかろう。」

「ホントに俺があなたより強いかなんて分からないだろ??」「そんなもの、特別にギルド加盟は先送りにして能力カードのみ作らせる事だつて可能だし、納得できなければ私と決闘でもいいぞ??」

「王様達が許してくれないだろう!!」「私が決めた男だと言えば大丈夫だ!!」

などなど…。

見苦しいと言われようが、此処は確実に人生の分水嶺だと感じたから必死だった。それでも、敗色濃厚だったために時間稼ぎの策をとった。

「…考えさせて下さい…」

そんな騒動があつてから、どうやって帰ったのか自分の部屋に帰つて来ていた。

「…どうすれば良いんだ…」

俺はここぞとばかりに独りごちる。

>>主よ。王に仔細を相談したらどうなんじゃ??<<

娘溺愛みたいだからのう。利害が一致するであろう?と、言った。

俺はその提案を採用すると、急いで書庫へ向かう。

書庫の扉をあけると、やはり王がいて俺を見つけると何かを察したのか人払いを命じた。

「よく来てくれたね。そろそろ来るころだと思っていた。そこに掛けてくれ。」

いつ俺がここに来るのを知ったのだろうか?ここに来るとは誰にも言っていないのに。

「はあ…、なぜ私がここに来ると?」

「まあ、疑問に思うのも当然だな。私は千里眼という特殊能力を持っているのだよ。ま、城内限定というのが玉に瑕ずだが。これは、王妃・腹心の將軍と大臣数名しか知らん事だから内密にな?」

いや、それでも十分凄いと思う。ただのお飾りじゃないと思っただが、城内はこの方の目が常に光っていると考えた方が良さだろう。行動圏が小さいのも頷ける。

「はあ…。いきなり脅されたた様なものですし、これからの流れも

大体予想できるので良い気はしませんが。それで、今朝のやり取りも見ていたのですか……。声も聞こえるんですね。」

「ああ、そうだ。それと、限定条件下では託宣の神殿程度なら見聞きする事も可能だ。意味はわかるな？」

恐らく、ステラと出会う前の俺達を見たということだろう。そうではないければ、昨日の探るような目はしないだろう。

「恐らく、出自の件でしょうか？」

「そうだ。私が神殿でステラに先行し様子を見ていたら、アーダル、そなたたちが祭壇から出てきた。あそこが何なのか聖国にある程度の縁がある者なら知っているだろう。その為、私は今朝娘がそなたへ申し出た件は否定しない。それに、例え今の現状がそうさせたとは言え、あの子が自ずからそなたを求めたのだ。あの子だって感がいい子だ。そなたに何かを感じたのだろう」

「あそこにはどんな謂れがあるのですか？」俺は恐る恐る尋ねた。

「……今でこそ、勇者だなんだ言われておるが、古文書を紐解き解釈した結果あそこには世界の調停者が現れるとなった。そのものが知つていようがいまいが、恐らくそうなる運命なのじゃろう。何代前なのか分からぬほど昔の託宣の巫女がそう申したとなつて居る。」

空の神め……なんて事を……

「……何故それを信じるのです？」

「鍛錬」

俺は凍りついた。この方はどこまで知っているのだろう。それを知

らないと迂闊な事を言えない。

「私はただ、普通に修練していただけですが？」

「まあ、剣の形を変える程度の武具ならあるさ。しかしな・・・そなたはソレと会話した。そんな武具は神代の時代まで遡らないと出てこない。もはや神話の域さ。」

「何故会話したと？」

会話は心の中で行ったはず。口になど出していなかった。傍から見たらただ瞑想しているに過ぎなかった。

「私もね、自分の能力に驚いたよ。君の心の中まで入れたのだから。恐らく、私が眠っていた事とこの城が私のテリトリーだと言う事、そして君の意識が覚醒してはいるモノの完全にその剣に意識を持って行っていた事が重なったためだろう。」

「はぁ・・・。もうここまで明け透けに話されては、私に打つ手なしではないですか。」

「おや？もう諦めたのかい？・・・いや、違うな。話を促してそこからの起死回生を試みるか。ますます、この国に欲しくなるわ。」

「くっ・・・。」

流星は王だ。この方は普段からこういう腹の探り合いを担当してきたのだろう。

「まあ、そう警戒する出ない。そなたに悪い話ではないのだ。少し協力してもらいたいだけじゃ。調停者殿を縛ってはどんな事になるか分かったものじゃないからな。」

「今、縛られ始めている気がするのですが？」

「違うな。するしないを決めるのはそなただ。私は提案をするだけだ。聞くだけ聞いてみなさい。」

俺は考えたが、結局聞くしか今のところ取れる策はなさそうだった。俺は頷き、話を促した。

「それでは、まず大まかな道筋を説明しよう。簡単に言えば、身分を上げる。そして、学院を卒業するまでに国内外で名前を上げる。その後正式婚約を発表。そして、婚約破棄だな。」

「婚約発表から婚約破棄の間がかなり端折られている気がします。」俺は、頂垂れながらもそう呟くしかなかった。

「では、詳しく話そう。まず身分だが、わが国の階級は公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の順にある。そして、子爵以下が王族が直接決める事が出来、それ以上は貴族院の3分の2の賛同が必要なのだ。先日のステラ救出の件でそなたらの褒美が少なかったため子爵にし、これを追加の褒美としよう。そして、御前試合に勝ち、レディアントとの婚約内定者として、内内に発表。しかし、慣例により正式婚約するには最低でも伯爵になってもらわねばならんから国内外で名前を上げてもらうのだ。これは、歳の事が一番効いてきているから学院在学中に済ませて貰う。もちろんこちらから斡旋するから心配はいらん。そして、伯爵になれば聖地への訪問の申請も直ぐに降りる故、聖地にて婚約破棄を命じられたと言えよ。だが、本音を言えば婚約破棄などせずにそのまま成婚の方がいいのだが。」

それは、そうだろう。一度婚約破棄すれば噂が噂を呼ぶ。

「・・・分かりました。今のところ、それか逃げるしかないらしい。」

俺は不承不承納得し、部屋を出てミオの部屋へ向かい事の顛末を伝えた。

ミオは心配そうに顔を覗きこんできたが、笑って返しておいた。

そして部屋に戻り、最速でこのミッションをクリアしてやると、結論に至ったのは夜八時くらいで辺りは暗くなったので寝ることにした。

翌日は、ミオの鍛錬につきあってやはりミオも覚醒させたようだった。

ミオの杖の名は「蒼天雨月」と言うらしい。青銀色の先端4分の1が渦を巻いた形になっておりその周りを珠が周回しているという、何とも不思議な形だった。

そして、御前試合まで二人の修練は続いた。また、この頃から段々とミオが大人しくなっていた。

御前試合のスケジュールが決まったのが、前日の昼。なかなか根回しに時間がかかったらしい。そのお陰で、公務は中止。翌日はコロシラムに満員の客が集まった。

俺達の前には、ギルドの昇格戦等も行われ、盛り上がってきたところで俺対シルヴァさんの戦いの幕が落とされた。俺の刀の形が変わっている事にいぶかしんだ様だが、気にするのを止めた様で薄っすらと癡猛な笑みを浮かべながら俺と対峙していた。その距離25m。俺はなんとなく、勝ったと確信しているチンピラを思い出したが、

試合開始の合図とともに俺達は駆け出したがシルヴァさんの顔は引きしまり、チンピラと形容したのが申し訳ない位の怒涛の剣戟で襲ってきた。

俺は、受け止めいなし、交わしたりを繰り返しながら大体のパターンを記憶すると、反撃に移った。

まずは、いなした体制から横薙ぎに一閃そして、距離をとろうとバックステップをしたシルヴァさんの懐に入り、勢いを殺さず刀の頭かしらで腹部を突くと、くの字に折れ曲がったシルヴァさんの顎めがけ下から拳を突き上げ、仰け反ったところを上段から斬りおろした。しかし、辛くも避けたシルヴァさんは俺の側面に回り込み斬りこんできたので、俺は回転して交わしお互いに距離をとり睨みあった。

此処までの時間、20秒程度。だが、観客の目を楽ませるには十分だったようで、歓声が凄い。そう一瞬周りを見ていたら、シルヴァさんが接近していた。慌てて回避しようとするも脚が動かない事に気付いて、足元をみるといつの間にか木の根の様なモノが脚に絡まって地面へとつながりとめていた。

その瞬間、頭上からのプレッシャーに刀を構えらるとお互いの武器がぶつかった。

「これが、俺の魔法『グロウ』だ。そして、こんな事も出来る・・・！」

すると植物の種を俺の胸のあたりに投げつけたかと思うと、一瞬のうちで成長して俺をとりこむように大樹へと変貌しようとしていた。俺は、殆ど動きをとれなかったので白光に技名を二つ告げ、大樹に飲み込まれた。

「まあ、楽しかったがもう少し骨のある奴だと思ってたぜ・・・」

シルヴァは独りごちながら、自分のゲートに戻ろうと歩きだした。すると、観客がざわめきだし嫌な予感がするので振り返ると大樹に物凄い量の光線が天から降り注ぎ跡形も無く燃やしつくした。その中に白い膜を纏った人型が浮かび、次の瞬間、俺の顎下1cmの所に刀の切っ先だけが浮かんでいた。その人型は勿論アードルで、白光の先端だけを飛ばし顎下にあてがったのだ。

「まさか、あんな状態で俺の魔法が破られるとは思ってなかった。降参だ。」

シルヴァは、底が知れない目の前の相手に冷や汗をかきながらいった。

「シルヴァさんこそ、無詠唱であんな魔法使うんですもん。俺が、『白天』と『光縛』を使わなかったら死んでましたよ。」

空の集まった光を一点に集束させ、対象を焼き尽くす『白天』
光で対象を包み拘束、と同時に外からの干渉を一切受け付けない『光縛』

止めは、白華光葬の廉価版みたいな白光の一部を散らし、任意の場所まで再結合すると言う『白刀』
勿論、すべて白光の固有スキルだ。

「聞いた事のない魔法名だが、光属性にはそんなものがあるのか・
・4大属性は初級までと聞いていて油断したよ。」完敗だ。そう言う
と、観客はこの日一番の盛り上がりを見せた。

「いや、俺もギリギリでしたよ。有り難うございました。」

そう言って、俺の濃い一週間は一旦休息を迎えた。

第3話 御前試合（後書き）

話毎にページ数が変わるかもしれませんが、暖かい目で見てやってください。

誤字脱字のご指摘、リクエスト、提案、感想等何か有りましたら、気軽にコメント頂けると嬉しいです。

あと、面倒かもしれませんが、ついので構いませんので評価のポイントだけでも頂けるとやる気がかなり出ます。

また、早速お気に入りに登録して頂いた方々そして、ご訪問頂いている方々、とても感謝しています。有り難うございます！！

最近、アクセス数等で皆さまのレスポンスを見る度に、予想外に嬉しくてニヤニヤしています。と同時に、皆さまにもっと楽しんで頂かなければと身の引き締まる思いだったりしています。

完結を目指して頑張ります。

今回は土曜の0時にアップする予定です。

どうぞ、次回もよろしく願います。

第4話 出発（前書き）

<<寝落ちして編集途中にアップされてしまいました・・・加筆しましたので既に読まれている方は、読んで頂けると嬉しいです！>>

どうも、黒猫です。ご訪問有り難うございます。

今回は、ユグドラシル魔法学院に出發します。アーダルの旅立ちからです。分量少なめですが、皆さんはどのくらいが好みなんでしょう？ご意見お待ちしております。

それでは！どうぞ宜しくお願いします。

第4話 出発

城へ戻ると、謁見の間に呼び出された。汗とか汚れとか取らなくていいもんか悩んだけど、待たせるのも悪いんでそのまま行くことにした。

着くと、初めて来たときよりも若干増えている貴族連中に圧倒されながらも、前回同様に恭しく頭を下げ膝をついた。

「面を上げよ。この度の戦い見事であった。少々案じておったが杞憂の様じゃったな。貴殿が強いのも分かったし、ステラ救出の件もある。そこで王の権限により子爵の爵位を与えようと思う。」

まあ、打ち合わせしてた事だし言いたい事はあるけど今言ったって良い事ないし、王と王妃を困らせるわけにもいかないので返事をした。

「はっ！！有りがたき幸せ！！魔法学院に行ってもこの国の為に力を尽くしましょう。」

「そう言ってくれて嬉しいぞ。レヴィアントも嬉しいであろうなあ。」

「おれは、もう少し間を置いてから切り出すだろうと思っていたので、咽た。」

「お、王妃様！！それはどういう・・・??？」

宰相が驚き、慌てた様子で聞き返した。

すると王妃は・・・

「皆にも聞いてほしいが、これはまだ口外する事を禁ずる。（周りを見回し…）第一皇女レヴィアントが、先日アーダルに結婚を申し出した。」

「なにっ！！」「そんな話は…！？」「そんなバカな！！」「等等…。」

一時は、そんな驚きの声で本音が漏れ掛っていたが、暫くすると王妃が言った。

「…はあ、この間にレヴィアントの幸せを心から願っているものが斯様に少ないとはな…。」

宰相を筆頭に驚いたという事は、この一手は有効だったのだろう。少なくとも、いま驚いた輩は宰相一派の可能性が高い。チエックしておいて損はない。王や王妃、腹心の大臣や貴族が鋭いまなざしで見っていた。

「喜ぼうと喜ぶまいと、これは決定事項である。しかしながら、アーダルならびにレヴィアントの申し出により近い身分を得てからと言う事にあいなった。故に、アーダルを婚約候補第一位とすると同時に学院卒業時までには伯爵以上の爵位を得る事を条件とする。」宰相一派も何とか出来る時間を得たことで、過激な手段をとる可能性は低くなる上に王族側も準備の時間を手に入れられる事になった。

「アーダルよ。レヴィアントも王族故の適齢期がある。爵位を上げるには、この国に貢献するのが一番早い。出来るだけ早く資格を得られるよう我らからの要請に協力してもらいたい。良いかな？？」

「はっ。仰せのままに。」

俺はとりあえずこの話の区切りをつけようとしたのだが…

「アーダル殿、先程の試合見事であった。しかしながら、初めての謁見の際にギルドに加入できず証明書が無いと申しておったと記憶しているが、ギルドに入らねば正式な依頼は受けられぬ。どうするおつもりか？」

「はっ。恐れながら、宰相殿も観て頂いた様にこの度の試合中に奥義と言っても差し支えないものを、幸いにも一国の国王様ならびに王妃様の御前で発現できました。すなわち、これ以上ない証明になったというわけです。それゆえ、この後ギルドに赴きギルドカード発行の手続きをしに行こうと考えております。」

宰相は、そんな切り返しも予想付かなかったようで唸っていた。

「アーダルよ。丁度、次の謁見者にギルドの神官がおる。折角だから、ここに神官を呼び皆の前でカードに記される能力を見せるのもいいのではないか？」

王はこれ幸いと、皆の前で俺の能力を開示させてけん制に使いたいらしい。俺もそれで厄介事が減るならと話に乗る。

「格別のご配慮、痛み入ります。では、ありがたくそうさせて頂きます。」

暫くすると、神官らしき人が入ってきた。

「お呼び立て、有り難うございます。この度は、ギルドカードを早急に作りたいとお伺いいたしました。どなたにお創りすれば宜しいでしょうか？」

「そこにいるアーダル殿に作ってやってくれ。ギルドの説明や能力

カードの説明は後でアードル殿が出向くときに頼む。」
こういう時は、宰相が話すのか。と、考えていると神官がこちらを
向き両手を握ってきた。

「それでは、これより能力カードを顕現致します。どうぞ、心と体
を楽になさってください。」

そう言うと、なにやら歌の様な呪文を唱え始め暫くすると俺と神官
の間に白く光る四角いカードの様なモノが現れた。そして、数
秒後呪文を謡い終わると同時に一瞬光輝き、次の瞬間には白いカー
ドが浮かんで体内に消えていった。

「先程宰相様から説明は後と言う事でしたが、簡単に説明させて頂
きます。今のが、能力カードと呼ばれるものでギルドの神官しか作
れない為に一般にはギルドカードや単にカードと呼ばれます。カー
ドの色はその者の属性を表し、他に氏名・ランク・称号等が記され
ます。また、カードは体内に保管され呼び出しに応じ顕現します。
カードの受け渡しは一部の例外を除き、持ち主が許可した場合のみ
可能です。・・・こんなところでしょうか。それでは呼び出してみ
てください。」

呼び出し方は念じれば良いそうなので、来い。と念じてみた。
すると、手の甲の上10cm位に浮かんで現れた。

内容を確認すると・・・

名：アードルⅡヴェラス

ランク：S

称号：メシア・幻刀使い・魔に愛されし者・精霊に愛されし者・神
に愛されし者 e t c …

これは、比較対象がいなくても破格の待遇と言っていていいだろう。

「これは、見せても良いのだろうか？」

俺は、神官がカードに触れる事を許可し渡すと、次第に焦りだした。

「っな！こ、国王様、王妃様失礼ながらカードの閲覧の許可は私には判断しかねますので、お願いしてもよろしいでしょうか??」

二人は頷くと、神官自ら渡しに行った。どうやら、王や王妃にはこちらが許可しなくてもカードに触れて見る事が出来るらしい。

「ほう……」「まあ！」

そう感嘆の声を上げると、

「アーダルよ。宰相や大臣、貴族にも見せて良いか？」

俺は頷き、宰相を許可した。

「なっ！！有り得ない！！陰謀だ！！！！」

宰相は絶句したかと思うと、暴言を吐いた。すると神官は当然、抗議した。

「宰相様、国王様・王妃様が認められてる上にカードは神からの賜り物。それを陰謀などと。あまり宜しくない称号がつきますぞ？」

「くっ……。」

宰相は、それ以降黙ってしまった。

「皆の者、宰相の反応からもうかがえると思うがアーダルのランクこそレヴィアントには及ばないものの、称号に関して言えば現時点ではレヴィアント以上のものがある。これに不服のある者は進言せよ。」

王は周りを見回し確認した。

「それでは、後で諸々の手続きがある故迎えがくるまで自室で待機していてくれ。下がってよいぞ。」

俺は、長く感じた謁見にやっと胸をなでおろし、頭を下げて謁見の間を出た。

「はああああ・・・疲れた。」

王城に来てから、腹芸に続く腹芸でもうへとへとになっており、自室のドアを閉めた瞬間に大きなため息が口を突いて出た。最近、倒れこんでばかりのベットにまたも倒れこむと、いつの間にもやら眠ってしまった様でドアを叩く音で目が覚めた。

ドン、ドン！

「はい。どちらさまでしょうか？」

「国務大臣様からのお呼びです。お迎えにあがりました。」

俺は、身だしなみを整え迎えに来た衛兵の後ろについて行った。

「失礼します。アーダル子爵をお連れ致しました。」

入れ。と、言う声とともに扉が開くとその先には白い髭を生やしたガツシリとした壮年の男性がいた。

「よく来てくれた。私は、ブレアリオスⅡスタツカード公爵と申す。王妃の従兄妹だ。今回の協力感謝する。やっと、宰相に対抗する手段が出来たとはいえ、アーダル殿の努力の上にか成り立たぬものゆえ爵位を上げるまでは学業の両立とで大変であろうが、どうか我

が国の為宜しく頼む。」
と、深々と頭を下げた。

俺は、面喰い慌てた。

「スタッカード様、頭をおあげください。私はステラ様の為に動いているにすぎません。話の流れで、この国のあるべき姿に戻す為に協力することになりましたが、元をたどれば友を助けるに尽きるのです。私は当面は実力を身につけ、割り当てられた国からの依頼をこなしていくつもりです。その他の調整などは、国王様、王妃様、国務大臣様にお任せするのですから寧ろお互いに頑張りましょう。」
俺は、チョット態度が不遜だったかと肝を冷やししながら手を差し出した。すると、微笑みながら握り返してくれた。

「その言葉、恩にきる。では、これからの話と行こうか。」

その言葉から次に部屋に戻る頃には、とっぷりと日が暮れていた。

部屋に戻ると、ミオとステラが待っていた。

「あ、お帰り〜。」「勝手にお邪魔して失礼いたします。」

「ああ、大分遅くなっちゃった。で、今後の話をしに来たんだと思うが、当面は二つやることがある。一つは実力を上げる事。もう一つは信頼できる仲間を増やすことだ。」

「じゃ、出発までは魔術の勉強と鍛錬を中心にこなして行くんだね？」

「まあ、メインはそうだな。だが、この場内にも仲間になってくれそうなやつらはいらるだろう。宰相側でも（・・・）な。ステラは、そこら辺を探つて教えてほしい。」

「わかりました。あくまで可能性のある人を探すという事ですね？」

「そうだ。今の段階は、まだ種をまくだけで十分だ。もし、出発までに何人が芽が出れば最高だが、そこまでいかなくとも時間はまだある。芽が出る可能性のある者にそれとなく種をまく。出発まであと、3週間だ。焦らず、宰相に気付かれないように動くぞ。」

「オツケー」「はいっ！」

「よし。じゃ、明日から宜しく頼む。」

そして、王都に到着してから1ヶ月が経ちアーダル達3人は聖国から学院に延びる街道を走る馬車にのっていた。

「種は出来るだけ仕込んだな。後は、実力の底上げと学院での仲間の確保をメインに考えながら行動していけば何とかなるだろう。二人とも、この3週間お疲れさん。あとは、芽が出るように栄養と水分を与えてやれば何とかなるさ。これからは普通に学生生活を楽し

もう。」

「隠密のスキルを活用する場面が無くなるのは残念だけど、学生生活はチヨ―楽しみ!!」

「そうですね。イイ方がいらっしやると良いですね!」

車内は、そんな話で盛り上がっていたが遠くの崖には黒い影が数体、馬車をみて不敵に笑っていた。

第4話 出発（後書き）

今回は短めです。次回は恐らく元の分量に戻ると思いますが、1話ほどの程度が読みやすいんでしょうか？コメント頂けると幸いです。

また、誤字脱字のご指摘、リクエスト、提案、感想等何か有りましたら、気軽にコメント頂けると嬉しいです。

あと、面倒かもしれませんが、ついでも構いませんので評価のポイントだけでも頂けるとやる気がかなり出ます！！

どうぞ、次回もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3436w/>

銀色の軌跡

2011年10月9日15時43分発行